平成29年中の人口の動き

概要

平成29年中の神戸市の人口増減数は3,470人減（自然増減数4,110人減，社会増減数640人増）であり，平成30年１月１日現在の推計人口は1,531,691人となった。

神戸市の人口は６年連続で減少した。社会増減数は３年連続でプラスを維持したものの，増加幅は前年より縮小した。自然増減数は11年連続でマイナスとなり，減少幅は前年より拡大した。

区別にみると，灘区，中央区は人口増加が続いている。東灘区，兵庫区も人口増加に転じたが，北区，長田区，須磨区，垂水区，西区は人口減少が続いている。

平成26年以降，自然増は東灘区のみで，全市では自然増減数の減少幅が毎年拡大している。

ここで述べる人口の動きは，住民基本台帳法の規定に基づく出生・死亡・転入・転出の届出を集計したものである。（平成24年７月８日までは外国人登録法の規定に基づく届出を含む。）

「自然動態」とは，一定期間における出生・死亡に伴う人口の動きであり，「社会動態」とは，転入・転出に伴う人口の動きである。これらの自然動態と社会動態を合わせた人口の動きを「人口動態」という。

自然増減数＝出生数－死亡数　　社会増減数＝転入数－転出数　人口増減数＝自然増減数＋社会増減数

Ⅰ　人口動態

１　概況

神戸市の平成29年中の人口増減数は3,470人のマイナスとなった。人口増減数は平成10年から平成13年までは年々拡大したが，その後平成14年からは概ね縮小傾向にあり，平成24年に減少に転じてから６年連続の人口減少となった。

人口増減数を自然増減数と社会増減数に分けると，自然増減数は4,110人のマイナスで，平成19年以降，11年連続でマイナスとなり，縮小幅も拡大している。一方，社会増減数は640人のプラスとなった。社会増減数は，平成24年はマイナス，平成25年はプラス，平成26年はマイナスと推移し，平成27年以降は３年連続のプラスとなったが，増加幅は縮小傾向にある。

人口増減数と人口の推移を長期的にみると，戦争の影響から昭和20年に38万人まで落ち込んでいた本市の人口は，終戦後の大幅な社会増加に支えられて急速に増加し，昭和31年には100万人を突破して，戦前の水準を回復した。

昭和30年代に入ると増加の速度は落ち着きを見せ始めるが，それでも昭和40年代にかけて，毎年１万～３万人の人口増加があり，この時期は概ね５年で10万人増加するペースであった。昭和50年代の前半は人口の伸び悩みが見られたが，後半には再び増加基調となり，平成６年まで年１万人程度の増加が続いた。昭和59年に140万人，平成４年には150万人に達し，平成７年の震災直前は152万人を超えた。

平成７年の阪神・淡路大震災は，神戸市に戦後初めての人口減をもたらし，一時142万人まで減少した。しかし，復興の進展に伴い人口増加が見られ，平成13年には再び150万人を超えた。平成16年11月には152万977人となり，震災直前の人口である152万365人を初めて超えた。以降も増加幅は縮小傾向ながら人口の増加を続けていたが，平成24年に減少に転じ，平成29年は６年連続の人口減少となった。

平成30年１月１日現在，神戸市の人口は153万1,691人となっている。

（平成29年10月１日現在は153万2,153人）

図1　人口増減数の推移

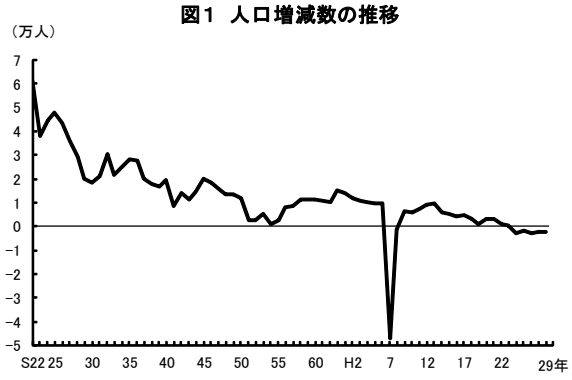


図2　人口の推移（各年10月１日現在）

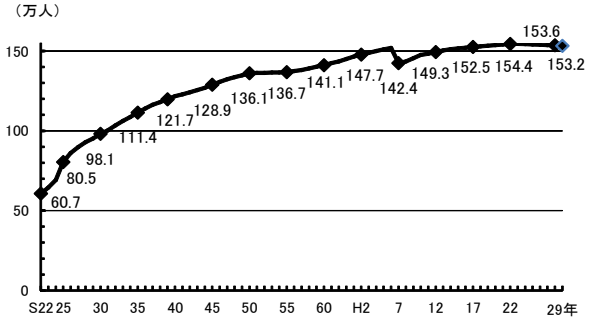


表１　人口の動きの推移

年　次	全市	東灘区	灘　区	中央区	兵庫区	北区	本区	北神	長田区	須磨区	本区	北須磨	垂水区	西　区
人口動態（人口増減数）														
平成12年	8,921	4,780	2,417	1,590	861	△ 678	△ 1,374	696	△ 480	△ 1,030	47	△ 1,077	△ 1,590	3,051
13年	9,562	4,638	1,987	1,743	413	△ 240	△ 1,070	830	△ 217	△ 54	849	△ 903	△ 581	1,873
14年	6,179	2,263	1,551	1,658	116	11	△ 643	654	△ 97	△ 654	304	△ 958	△ 449	1,780
15年	5,327	2,147	1,067	1,917	222	434	△ 532	966	△ 561	△ 901	41	△ 942	△ 175	1,177
16年	4,228	2,737	1,125	1,239	△ 525	435	△ 649	1,084	△ 460	△ 872	△ 88	△ 784	△ 1,369	1,918
17年	4,945	1,982	575	2,615	△ 281	671	80	591	△ 280	△ 741	△ 53	△ 688	△ 1,142	1,546
18年	3,075	1,114	635	1,840	227	138	△ 533	671	△ 486	△ 1,561	△ 530	△ 1,031	△ 1,142	2,310
19年	980	△ 204	555	868	△ 44	187	△ 626	763	△ 558	△ 1,087	△ 206	△ 881	△ 688	2,106
20年	3,310	1,279	600	1,519	066	△ 170	△ 1,012	842	△ 594	△ 329	707	△ 1,036	△ 436	567
21年	3,436	532	1,171	1,423	369	380	△ 486	866	△ 714	△ 66	705	△ 771	162	179
22年	842	603	687	937	△ 515	231	△ 695	926	△ 317	△ 1,124	40	△ 1,164	263	77
23年	501	839	704	1,167	△ 491	△ 452	△ 1,131	679	△ 595	△ 743	236	△ 979	△ 114	186
24年	△ 2,846	760	325	672	△ 873	△ 882	△ 1,331	449	△ 1,423	△ 1,532	△ 305	△ 1,227	40	67
25年	△ 1,507	986	451	1,204	△ 216	△ 1,478	△ 1,392	△ 86	△ 633	△ 545	81	△ 626	△ 323	△ 953
26年	△ 3,005	392	931	811	△ 242	△ 1,832	△ 1,505	△ 327	△ 506	△ 412	261	△ 673	△ 642	△ 1,505
27年	△ 2,121	820	258	1,704	334	△ 1,992	△ 1,608	△ 384	△ 941	△ 1,314	△ 529	△ 785	13	△ 1,003
28年	△ 2,320	△ 73	433	2,449	△ 117	△ 1,781	△ 1,262	△ 519	△ 654	△ 1,178	△ 188	△ 990	△ 531	△ 868
29年	**△ 3,470**	**286**	**363**	**1,736**	**86**	**△ 1,921**	**△ 1,438**	**△ 483**	**△ 703**	**△ 1,012**	**△ 210**	**△ 802**	**△ 751**	**△ 1,554**
自然動態（自然増減数）														
平成12年	2,314	036	141	△ 156	△ 355	410	170	240	△ 237	140	△ 52	200	626	093
13年	1,814	823	139	△ 281	△ 208	195	17	178	△ 294	270	55	215	348	822
14年	1,859	1,005	125	△ 215	△ 277	148	△ 19	167	△ 279	141	11	130	382	829
15年	1,272	824	34	△ 203	△ 314	203	△ 74	277	△ 480	132	△ 1	133	364	712
16年	1,099	726	163	△ 118	△ 350	199	△ 47	246	△ 459	△ 8	△ 77	69	292	654
17年	△ 5	648	40	△ 183	△ 455	—	△ 142	142	△ 485	△ 101	△ 55	△ 46	△ 52	583
18年	236	655	46	△ 179	△ 344	△ 15	△ 176	161	△ 450	△ 163	△ 143	△ 20	96	590
19年	△ 181	564	△ 28	△ 218	△ 426	74	△ 143	217	△ 546	△ 104	△ 86	△ 18	△ 88	591
20年	△ 513	437	34	△ 161	△ 512	△ 29	△ 246	217	△ 600	△ 198	△ 144	△ 54	△ 48	564
21年	△ 508	493	△ 15	△ 221	△ 439	△ 2	△ 219	217	△ 610	△ 149	△ 93	△ 56	△ 34	469
22年	△ 1,479	407	38	△ 215	△ 591	△ 120	△ 244	124	△ 604	△ 349	△ 137	△ 212	△ 311	266
23年	△ 1,642	267	△ 1	△ 128	△ 545	△ 197	△ 335	138	△ 697	△ 312	△ 128	△ 184	△ 259	230
24年	△ 2,473	281	△ 114	△ 201	△ 615	△ 384	△ 470	86	△ 839	△ 475	△ 225	△ 250	△ 345	219
25年	△ 2,586	360	△ 32	△ 159	△ 695	△ 462	△ 532	70	△ 771	△ 416	△ 137	△ 279	△ 472	61
26年	△ 2,863	113	△ 164	△ 149	△ 559	△ 521	△ 550	29	△ 821	△ 391	△ 109	△ 282	△ 352	△ 19
27年	△ 3,435	156	△ 98	△ 143	△ 622	△ 714	△ 652	△ 62	△ 783	△ 501	△ 180	△ 321	△ 573	△ 157
28年	△ 3,594	74	△ 88	△ 102	△ 568	△ 765	△ 677	△ 88	△ 834	△ 548	△ 231	△ 317	△ 480	△ 283
29年	**△ 4,110**	**21**	**△ 150**	**△ 77**	**△ 631**	**△ 809**	**△ 640**	**△ 169**	**△ 849**	**△ 638**	**△ 271**	**△ 367**	**△ 545**	**△ 432**
社会動態（社会増減数）														
12年	6,607	3,944	2,276	1,746	1,216	△ 1,096	△ 1,552	456	△ 243	△ 1,178	99	△ 1,277	△ 2,216	2,158
13年	7,748	3,815	1,848	2,024	621	△ 435	△ 1,087	652	77	△ 324	794	△ 1,118	△ 929	1,051
14年	4,320	1,258	1,426	1,873	393	△ 137	△ 624	487	182	△ 795	293	△ 1,088	△ 831	951
15年	4,055	1,323	1,033	2,120	536	231	△ 458	689	△ 81	△ 1,033	42	△ 1,075	△ 539	465
16年	3,129	2,011	962	1,357	△ 175	236	△ 602	838	△ 1	△ 864	△ 11	△ 853	△ 1,661	1,264
17年	4,950	1,334	535	2,798	174	671	222	449	205	△ 640	2	△ 642	△ 1,090	963
18年	2,839	459	589	2,019	571	153	△ 357	510	△ 36	△ 1,398	△ 387	△ 1,011	△ 1,238	1,720
19年	1,161	△ 768	583	881	382	63	△ 483	546	△ 12	△ 933	△ 120	△ 813	△ 550	1,515
20年	3,823	842	574	1,680	1,378	△ 141	△ 766	625	6	△ 131	851	△ 982	△ 388	3
21年	3,944	39	1,186	1,644	808	382	△ 267	649	△ 104	83	798	△ 715	196	△ 290
22年	2,321	196	649	1,152	76	351	△ 451	802	287	△ 775	177	△ 952	574	△ 189
23年	2,143	572	705	1,295	54	△ 255	△ 796	541	102	△ 431	364	△ 795	145	△ 44
24年	△ 373	479	439	873	△ 258	△ 498	△ 861	363	△ 584	△ 1,057	△ 80	△ 977	385	△ 152
25年	1,079	626	483	1,363	479	△ 1,016	△ 860	△ 156	138	△ 129	218	△ 347	149	△ 1,014
26年	△ 142	279	1,095	960	317	△ 1,311	△ 955	△ 356	315	△ 21	370	△ 391	△ 290	△ 1,486
27年	1,314	664	356	1,047	956	△ 1,270	△ 956	△ 322	△ 150	△ 013	△ 349	△ 464	506	△ 046
28年	1,274	△ 147	521	2,551	451	△ 1,016	△ 585	△ 431	180	△ 630	43	△ 673	△ 51	△ 585
29年	**640**	**265**	**513**	**1,813**	**717**	**△ 1,112**	**△ 798**	**△ 314**	**146**	**△ 374**	**61**	**△ 435**	**△ 206**	**△ 1,122**

注）社会増減数については，北区の北本区と北神，須磨区の須磨本区と北須磨との間の移動数を含む数値により算出している。

２　区別の状況

東灘区は平成20年以降８年連続で人口増加し，平成28年は一旦減少したが，平成29年は再び増加となった。平成29年は，自然増減数，社会増減数ともにプラスとなっている。

灘区は21年連続，中央区は20年連続で人口が増加している。灘区，中央区では自然増減数はマイナスだが，社会増減数のプラスがそれを上回る状況が続いている。

兵庫区は平成25年以降，社会増減数が５年連続のプラスで，平成29年は社会増減数のプラスが自然増減数のマイナスを上回ったため，人口増加に転じた。

長田区は社会増減数はプラスを維持したが，自然増減数のマイナスがそれを上回っているため，人口減少が続いている。

北区，須磨区，垂水区，西区は自然増減数及び社会増減数ともにマイナスとなっている。

北区のうち本区の人口は，平成18年以降12年連続で減少している。北神は平成24年までは増加していたが，平成25年以降５年連続で減少している。

須磨区のうち本区の人口は，平成25年，26年と２年連続で増加したが，平成27～29年は３年連続で減少し，北須磨は平成８年以降人口減少が続いている。

垂水区の人口は平成27年にわずかに増加したが，平成28年以降は社会増減数がマイナスに転じたことにより，再び人口減少に転じている。

西区は震災以降プラスであった自然増減数が平成26年以降マイナスで，減少幅も拡大傾向にあり，社会増減数も平成21年以降マイナスとなっている。

図3－1　人口増減数の推移（東灘区，灘区，中央区）

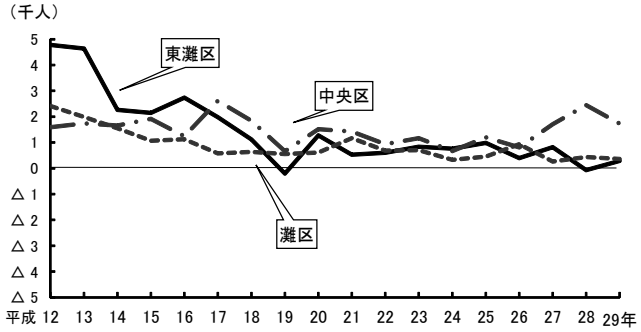


図4－1　人口数の推移（東灘区，灘区，中央区）

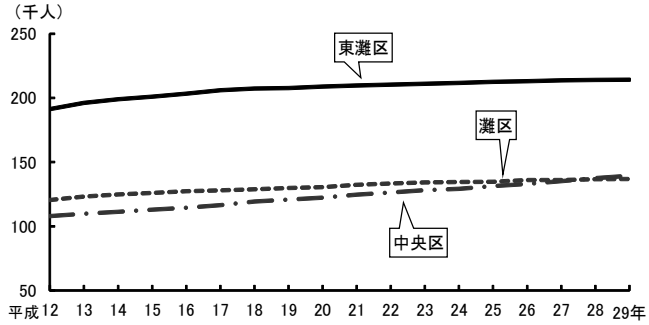


図3－2　人口増減数の推移（兵庫区，長田区，須磨区）

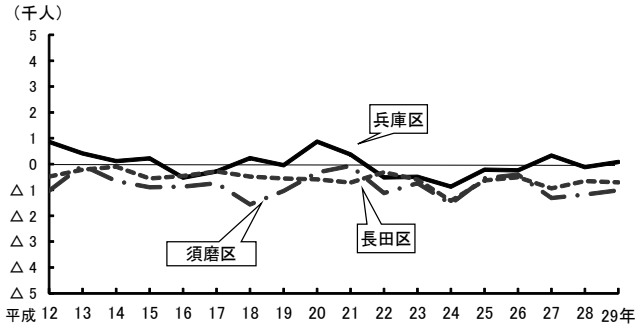


図4－2　人口数の推移（兵庫区，長田区，須磨区）

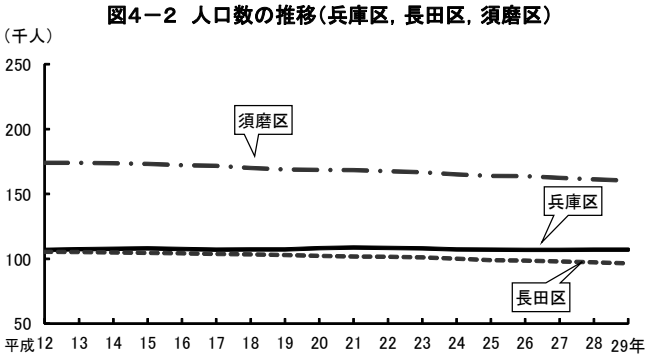


図3－3　人口増減数の推移（北区，垂水区，西区）

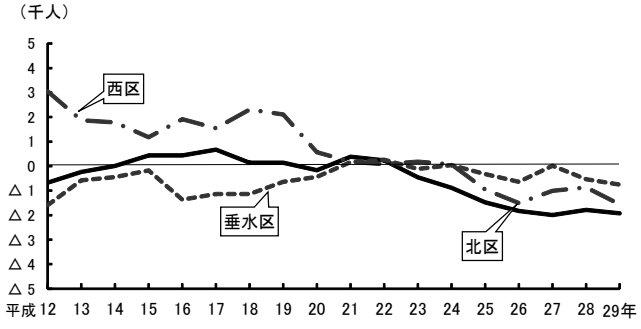
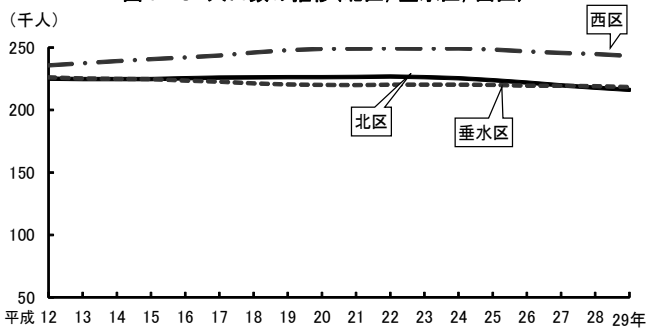


図4－3　人口数の推移（北区，垂水区，西区）



（参考）表２　平成29年月別人口の動き

年　次	全市	東灘区	灘　区	中央区	兵庫区	北区	本区	北神	長田区	須磨区	本区	北須磨	垂水区	西　区
	人　口　増　減　数													
平成29年1月中	△ 773	△ 53	△ 21	27	△ 75	△ 98	△ 65	△ 33	△ 121	△ 77	△ 32	△ 45	-225	-130
2月中	△ 1,098	△ 114	△ 102	△ 106	△ 58	△ 190	△ 135	△ 55	△ 96	△ 77	△ 24	△ 53	-193	-162
3月中	△ 2,432	△ 306	△ 54	38	△ 40	△ 498	△ 280	△ 218	△ 103	△ 411	△ 181	△ 230	-346	-712
4月中	3,203	757	382	1,099	326	△ 60	△ 111	51	155	161	98	63	266	117
5月中	△ 138	166	7	32	48	△ 144	△ 123	△ 21	△ 61	△ 27	—	△ 27	-41	-118
6月中	△ 422	△ 49	58	77	△ 38	△ 156	△ 98	△ 58	△ 58	△ 91	△ 51	△ 40	-76	-89
7月中	△ 180	△ 121	△ 8	97	37	△ 60	△ 41	△ 19	△ 10	△ 64	21	△ 85	63	-114
8月中	△ 635	61	△ 131	33	△ 86	△ 129	△ 123	△ 6	△ 100	△ 89	△ 17	△ 72	-68	-126
9月中	△ 533	—	63	54	△ 54	△ 203	△ 98	△ 105	△ 149	△ 114	△ 29	△ 85	-16	-114
10月中	656	97	100	415	199	△ 43	△ 76	33	11	△ 117	△ 29	△ 88	44	-50
11月中	△ 418	△ 75	42	31	△ 104	△ 155	△ 170	15	△ 98	△ 34	56	△ 90	-74	49
12月中	△ 700	△ 77	27	△ 61	△ 69	△ 185	△ 118	△ 67	△ 73	△ 72	△ 22	△ 50	-85	-105
年 合 計	**△ 3,470**	**286**	**363**	**1,736**	**86**	**△ 1,921**	**△ 1,438**	**△ 483**	**△ 703**	**△ 1,012**	**△ 210**	**△ 802**	**△ 751**	**△ 1,554**
	自　然　増　減　数													
平成29年1月中	△ 577	2	△ 40	—	△ 94	△ 116	△ 85	△ 31	△ 99	△ 59	△ 13	△ 46	-125	-46
2月中	△ 432	△ 26	△ 32	△ 9	△ 59	△ 75	△ 61	△ 14	△ 70	△ 50	△ 25	△ 25	-74	-37
3月中	△ 529	△ 32	△ 11	△ 18	△ 106	△ 84	△ 60	△ 24	△ 92	△ 71	△ 36	△ 35	-59	-56
4月中	△ 382	△ 29	△ 40	△ 21	△ 63	△ 72	△ 50	△ 22	△ 53	△ 31	△ 7	△ 24	-30	-43
5月中	△ 323	3	△ 7	12	△ 40	△ 79	△ 67	△ 12	△ 82	△ 58	△ 15	△ 43	-34	-38
6月中	△ 170	△ 5	22	7	△ 31	△ 22	△ 15	△ 7	△ 78	△ 32	△ 24	△ 8	-22	-9
7月中	△ 52	53	—	3	△ 31	△ 32	△ 35	3	△ 44	△ 15	△ 2	△ 13	4	10
8月中	△ 295	29	2	△ 16	△ 44	△ 37	△ 46	9	△ 67	△ 75	△ 28	△ 47	-28	-59
9月中	△ 280	15	△ 12	8	△ 27	△ 62	△ 49	△ 13	△ 74	△ 69	△ 38	△ 31	-29	-30
10月中	△ 266	24	18	△ 22	△ 40	△ 50	△ 31	△ 19	△ 57	△ 66	△ 31	△ 35	-37	-36
11月中	△ 340	8	△ 19	△ 14	△ 49	△ 78	△ 60	△ 18	△ 69	△ 37	△ 15	△ 22	-50	-32
12月中	△ 464	△ 21	△ 31	△ 7	△ 47	△ 102	△ 81	△ 21	△ 64	△ 75	△ 37	△ 38	-61	-56
年 合 計	**△ 4,110**	**21**	**△ 150**	**△ 77**	**△ 631**	**△ 809**	**△ 640**	**△ 169**	**△ 849**	**△ 638**	**△ 271**	**△ 367**	**△ 545**	**△ 432**
	社　会　増　減　数													
平成29年1月中	△ 196	△ 55	19	27	19	18	20	△ 2	△ 22	△ 18	△ 19	1	-100	-84
2月中	△ 666	△ 88	△ 70	△ 97	1	△ 115	△ 74	△ 41	△ 26	△ 27	1	△ 28	-119	-125
3月中	△ 1,903	△ 274	△ 43	56	66	△ 414	△ 220	△ 194	△ 11	△ 340	△ 145	△ 195	-287	-656
4月中	3,585	786	422	1,120	389	12	△ 61	73	208	192	105	87	296	160
5月中	185	163	14	20	88	△ 65	△ 56	△ 9	21	31	15	16	-7	-80
6月中	△ 252	△ 44	36	70	△ 7	△ 134	△ 83	△ 51	20	△ 59	△ 27	△ 32	-54	-80
7月中	△ 128	△ 174	△ 8	94	68	△ 28	△ 6	△ 22	34	△ 49	23	△ 72	59	-124
8月中	△ 340	32	△ 133	49	△ 42	△ 92	△ 77	△ 15	△ 33	△ 14	11	△ 25	-40	-67
9月中	△ 253	△ 15	75	46	△ 27	△ 141	△ 49	△ 92	△ 75	△ 45	9	△ 54	13	-84
10月中	922	73	82	437	239	7	△ 45	52	68	△ 51	2	△ 53	81	-14
11月中	△ 78	△ 83	61	45	△ 55	△ 77	△ 110	33	△ 29	3	71	△ 68	-24	81
12月中	△ 236	△ 56	58	△ 54	△ 22	△ 83	△ 37	△ 46	△ 9	3	15	△ 12	-24	-49
年 合 計	**640**	**265**	**513**	**1,813**	**717**	**△ 1,112**	**△ 798**	**△ 314**	**146**	**△ 374**	**61**	**△ 435**	**△ 206**	**△ 1,122**

注）社会増減数については，北区の北本区と北神，須磨区の須磨本区と北須磨との間の移動数を含む数値により算出している。

Ⅱ　自然動態

１　概況

平成29年中の自然増減数は4,110人のマイナスとなった。自然増減数は震災のあった平成７年を除き，プラスの状態が長く続いていたが，平成17年にマイナスに転じ，平成18年に再びプラスとなったものの，平成19年以降11年連続でマイナスであり，減少幅も拡大している。

出生数は11,565人で，前年より559人減少した。平成21年以降，出生数は減少傾向にある。一方，死亡数は15,675人で，前年より43人減少した。

出生率は7.55‰（パーミル：人口1,000人に対する割合）で，前年を0.34ポイント下回り，死亡率が前年と同じく10.23‰となったため，自然増減率はマイナス2.68‰と，11年連続で低下した。

表３　自然動態及び自然動態率

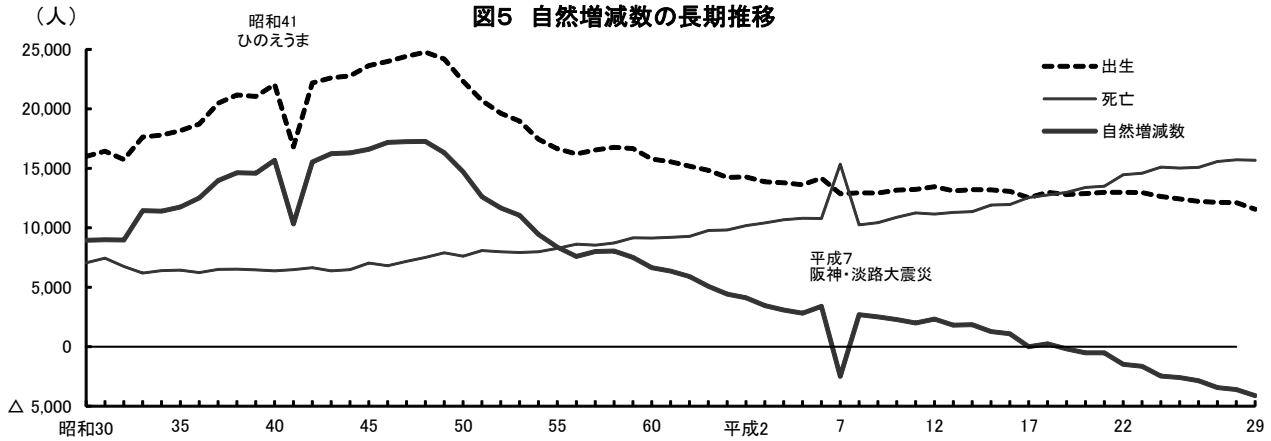
（単位：人，‰）

年次・区	自然増減数	出生数	死亡数	自然増減率	出生率	死亡率	a) 人口（10月１日現在）
12　年	2,314	13,460	11,146	1.55	9.01	7.46	1,493,398
13　年	1,814	13,110	11,296	1.21	8.72	7.51	1,503,480
14　年	1,859	13,219	11,360	1.23	8.75	7.52	1,510,662
15　年	1,272	13,182	11,910	0.84	8.69	7.86	1,516,155
16　年	1,099	13,062	11,963	0.72	8.59	7.87	1,520,267
17　年	△ 5	12,540	12,545	△ 0.00	8.22	8.22	1,525,393
18　年	236	12,984	12,748	0.15	8.49	8.33	1,529,817
19　年	△ 181	12,792	12,973	△ 0.12	8.35	8.47	1,532,428
20　年	△ 513	12,878	13,391	△ 0.33	8.38	8.72	1,536,433
21　年	△ 508	12,981	13,489	△ 0.33	8.42	8.75	1,541,214
22　年	△ 1,479	12,979	14,458	△ 0.96	8.40	9.36	1,544,200
23　年	△ 1,642	12,954	14,596	△ 1.06	8.39	9.45	1,544,970
24　年	△ 2,473	12,636	15,109	△ 1.60	8.19	9.80	1,543,075
25　年	△ 2,586	12,437	15,023	△ 1.68	8.08	9.76	1,541,169
26　年	△ 2,863	12,218	15,081	△ 1.86	7.94	9.79	1,539,755
27　年	△ 3,435	12,140	15,575	△ 2.23	7.89	10.13	1,537,272
28　年	△ 3,594	12,124	15,718	△ 2.34	7.89	10.23	1,535,765
平成29年	**△ 4,110**	**11,565**	**15,675**	△ 2.68	7.55	10.23	**1,532,153**
東灘区	21	1,740	1,719	0.10	8.12	8.03	214,156
灘区	△ 150	1,134	1,284	△ 1.10	8.28	9.37	136,968
中央区	△ 77	1,209	1,286	△ 0.55	8.68	9.23	139,333
兵庫区	△ 631	820	1,451	△ 5.89	7.66	13.55	107,056
北区	△ 809	1,404	2,213	△ 3.74	6.49	10.24	216,190
本区	△ 640	827	1,467	△ 4.85	6.27	11.11	132,000
北神	△ 169	577	746	△ 2.01	6.85	8.86	84,190
長田区	△ 849	610	1,459	△ 8.80	6.32	15.12	96,493
須磨区	△ 638	1,167	1,805	△ 3.98	7.28	11.27	160,197
本区	△ 271	573	844	△ 3.77	7.96	11.73	71,971
北須磨	△ 367	594	961	△ 4.16	6.73	10.89	88,226
垂水区	△ 545	1,851	2,396	△ 2.50	8.47	10.97	218,417
西区	△ 432	1,630	2,062	△ 1.78	6.70	8.47	243,343

注）自然増減率，出生率，死亡率は，各年10月１日現在の人口 1,000人当たりの率である。
a）平成12年，17年，22年，27年は国勢調査結果，それ以外は推計人口である。

自然増減数の長期的な推移をみると，昭和33年以降，出生数はほぼ毎年増加し，死亡数は横ばいの状態が続いていたため，自然増減数は出生数に比例して拡大した。昭和45年を過ぎると，それまで横ばいで推移していた死亡数が，徐々に増加傾向を示すようになった。また，出生数は第２次ベビーブーム期の昭和48年をピークに減少に転じ，自然増減数の縮小が始まった。震災後の出生数は横ばいが続き，平成17年に12,540人まで減少したものの，その後は小幅に増減を繰り返していたが，平成22年以降は減少傾向にあり，平成29年は12,000人を割り込んだ。一方，震災後の死亡数は平成13年以降増加傾向にある。平成29年も死亡数が出生数を上回ったため，自然増減数はマイナスとなり，11年連続の自然減となった。

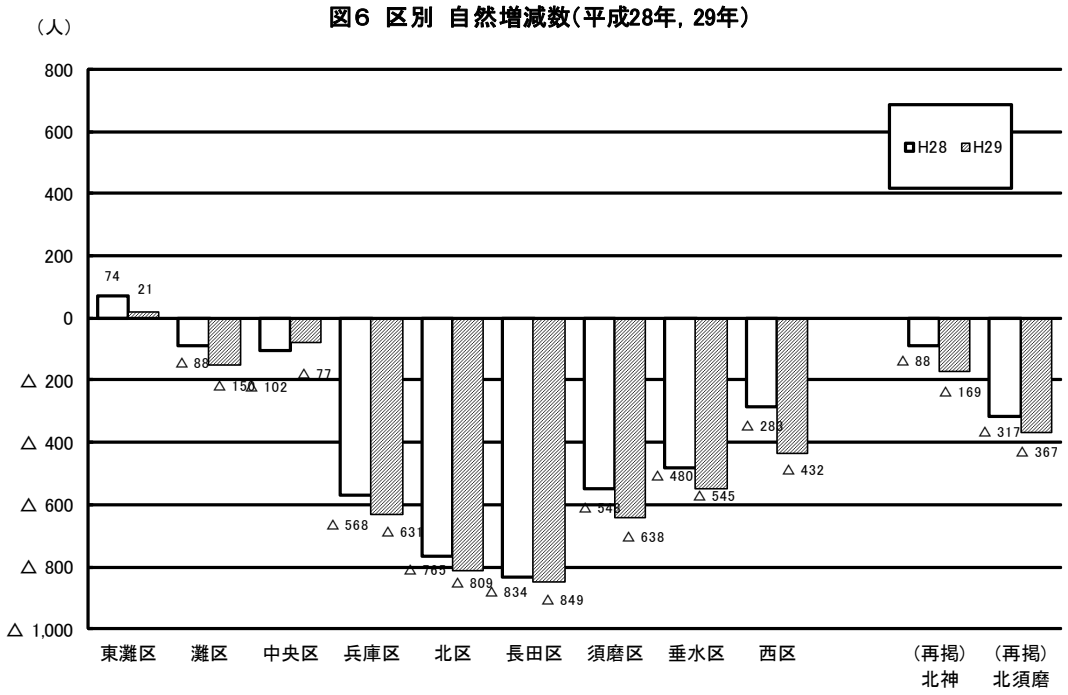
図5 自然増減数の長期推移



自然増減数を区別にみると，プラスは21人増の東灘区のみで，他の区ではマイナスとなっている。

最も自然減が大きかったのは長田区の849人で，次いで北区の809人となっている。中央区は77人，兵庫区は631人のマイナスで，中央区，兵庫区，長田区の３区は震災前からマイナスが続いている。灘区は150人のマイナスで，７年連続となった。須磨区のうち本区は271人，北須磨は367人のマイナスとなり，須磨区全体で638人のマイナスとなった。本区は平成15年以降15年連続，北須磨は平成17年以降13年連続，須磨区全体でも14年連続となっている。垂水区は545人のマイナスとなり，平成19年以降11年連続となった。西区は432人のマイナスで，平成26年以降４年連続のマイナスとなった。

図6 区別 自然増減数(平成28年, 29年)



２　出生

平成29年の出生数は11,565人で，前年比559人減，出生率は7.55‰で，前年比0.34ポイント低下した。

出生率の推移をみると，昭和30年代から40年代にかけて16‰台から18‰台へと上昇傾向にあった。しかし，昭和48年の第２次ベビーブーム期をピークに低下に転じ，昭和60年代には10‰台まで低下した。

その後も，平成９年から８‰台，平成26年から７‰台となり，低下傾向が続いている。20年前の平成９年の8.88‰と比較すると，20年間で1.33ポイント低下している。

このような出生率の低下傾向は全国でも同様にみられるが，神戸市の出生率は過去20年間常に全国値を下回っている。

区別にみると，出生率の高い順に中央区（8.68‰），垂水区（8.47‰），灘区（8.28‰）となっている。一方，出生率が低いのは，長田区（6.32‰），北区（6.49‰），西区（6.70‰）である。

区別の出生率を20年前の平成９年及び10年前の平成19年と比較すると，兵庫区，北区，長田区，須磨区，西区では低下を続けている。東灘区，灘区では平成９年から19年にかけては上昇したが，平成19年から29年にかけては低下しており，垂水区では平成９年から19年にかけては低下したが，平成19年から29年にかけては上昇している。一方，中央区では上昇を続けている。平成29年の出生率は，灘区，中央区を除く７区で平成９年を下回っている。

図7　出生率及び死亡率の推移（神戸市，全国）

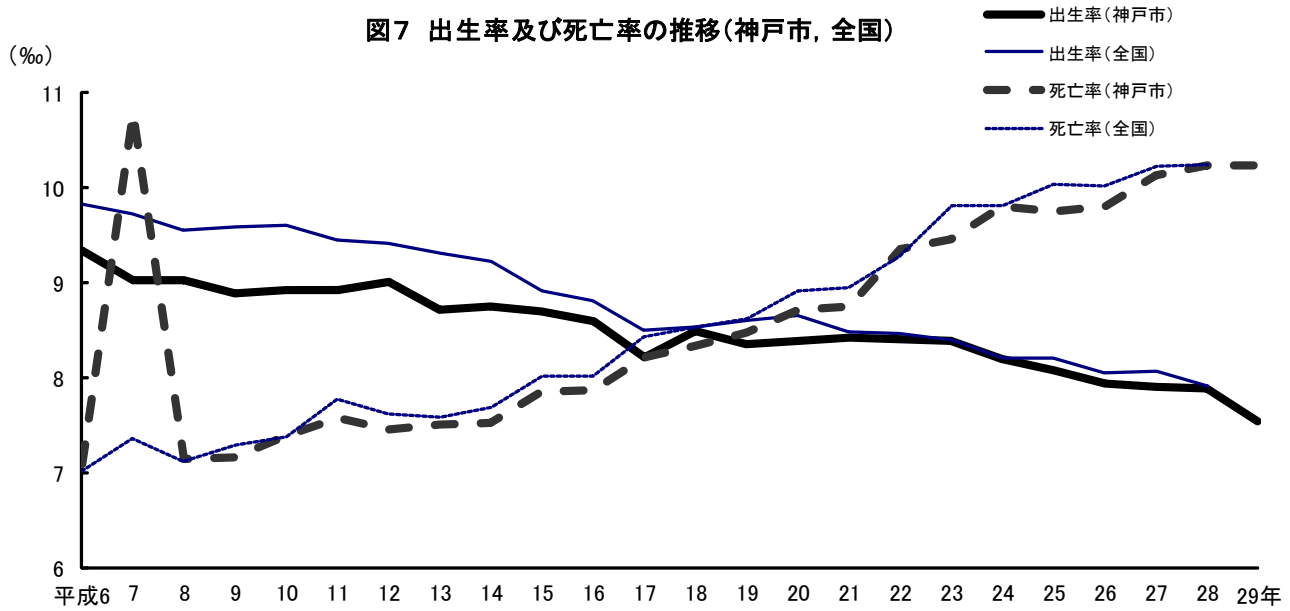


表４　出生率，死亡率の推移（神戸市，全国）

（単位：‰）

年次	平成6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
											出生率													
神戸市	9.33	9.03	9.02	8.88	8.92	8.92	9.01	8.72	8.75	8.69	8.59	8.22	8.49	8.35	8.38	8.42	8.40	8.38	8.19	8.07	7.94	7.90	7.89	**7.55**
全国	9.83	9.73	9.55	9.58	9.60	9.45	9.41	9.31	9.23	8.91	8.81	8.50	8.53	8.60	8.65	8.49	8.46	8.40	8.21	8.21	8.05	8.06	7.91	…
											死亡率													
神戸市	7.10	10.78	7.15	7.16	7.38	7.58	7.46	7.51	7.52	7.86	7.87	8.22	8.33	8.47	8.72	8.75	9.36	9.45	9.79	9.75	9.79	10.13	10.23	**10.23**
全国	7.02	7.36	7.12	7.30	7.37	7.78	7.62	7.59	7.69	8.01	8.01	8.44	8.53	8.62	8.92	8.95	9.28	9.80	9.81	10.03	10.02	10.23	10.24	…

資料：総務省統計局『人口推計月報』（全国）
注）平成29年全国数値は未定。

３　死亡

平成29年の死亡数は15,675人で，前年比43人減，死亡率は10.23‰で，前年比横ばいであった。

死亡率の推移をみると，昭和30年代以降おおむね５‰台で横ばいに推移していたが，昭和55年に６‰台，平成４年には７‰台，平成17年から８‰台，平成22年から９‰台，平成27年から10‰台となり上昇傾向が続いている。20年前の平成９年と比較すると，20年間で3.07ポイント上昇している。

死亡率の上昇傾向は，全国でも同様である。なお，昭和56年以降全国値をほぼ上回っていた神戸市の死亡率は，平成11年以降全国値を下回る傾向が続いている。

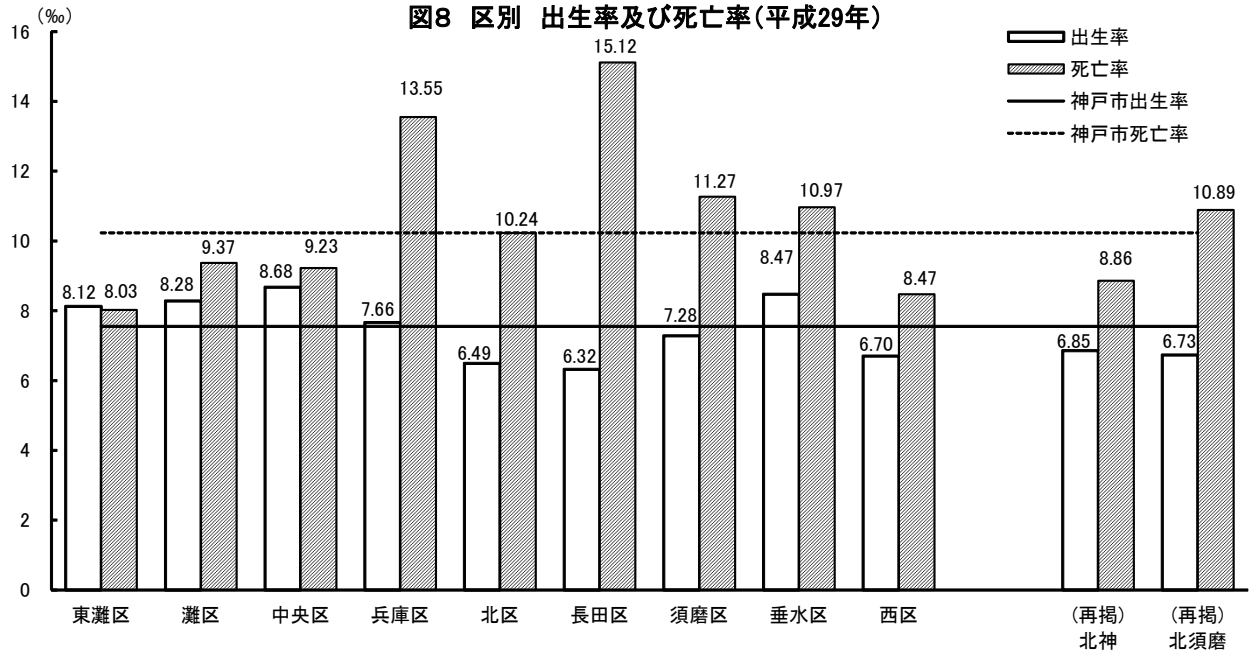
区別にみると，死亡率の高い順に長田区（15.12‰），兵庫区（13.55‰），須磨区（11.27‰）となっている。一方，死亡率が低いのは，東灘区（8.03‰），西区（8.47‰）である。東灘区を除いて死亡率が出生率を上回っている。

区別の死亡率を20年前の平成９年及び10年前の平成19年と比較すると，中央区では平成９年から19年にかけては上昇し，平成19年から29年にかけては低下したが，他の８区においては平成９年から上昇を続けている。なお，20年前の平成９年と比較し，最も死亡率が上昇しているのは長田区で，4.44ポイント上昇している。

表５　区別　出生率と死亡率の推移

（単位：‰）

年　次	東灘区	灘　区	中央区	兵庫区	北　区	本区	北神	長田区	須磨区	本区	北須磨	垂水区	西　区
							出　生　率						
平成９年	8.88	7.89	6.88	7.87	9.20	…	…	7.68	8.81	…	…	10.33	9.52
19年	9.44	8.40	7.98	7.78	8.04	7.32	9.32	7.36	7.93	8.75	7.34	8.29	8.85
29年	8.12	8.28	8.68	7.66	6.49	6.27	6.85	6.32	7.28	7.96	6.73	8.47	6.70
							死　亡　率						
平成９年	6.22	8.13	9.08	10.91	6.36	…	…	10.68	6.91	…	…	6.59	4.93
19年	6.73	8.61	9.78	11.75	7.72	8.31	6.68	12.66	8.54	9.97	7.52	8.69	6.47
29年	8.03	9.37	9.23	13.55	10.24	11.11	8.86	15.12	11.27	11.73	10.89	10.97	8.47



Ⅲ　社会動態

１　概況

平成29年中の社会増減数は640人のプラスで，前年と比べ634人減少したが，プラスを維持した。

転入数は79,343人で，そのうち市外からの転入者数は51,565人であった。一方，転出者数は78,703人で，そのうち市外への転出者数は49,746人であった。

社会増減率は0.42‰で，前年比0.41ポイント低下した。転入率は51.79‰で，うち市外からは33.66‰，転出率は51.37‰で，うち市外へは32.47‰となった。転入率は前年より0.1ポイント上昇し，転出率も前年より0.51ポイント上昇している。

表 6　社 会 動 態 及 び 社 会 動 態 率

（単位：人，‰）

年次・区	社会増減数	転入	うち市外から	転出	うち市外へ	社会増減率	転入率	うち市外から	転出率	うち市外へ	a) 人口（10月１日現在）
12 年	6,607	100,251	60,005	93,644	53,515	4.42	67.13	40.18	62.71	35.83	1,493,398
13 年	7,748	95,641	59,607	87,893	51,911	5.15	63.61	39.65	58.46	34.53	1,503,480
14 年	4,320	89,755	56,238	85,435	51,939	2.86	59.41	37.23	56.55	34.38	1,510,662
15 年	4,055	90,174	56,098	86,119	52,035	2.67	59.48	37.00	56.80	34.32	1,516,155
16 年	3,129	86,887	54,656	83,758	51,620	2.06	57.15	35.95	55.09	33.95	1,520,267
17 年	4,950	85,774	54,997	80,824	50,098	3.25	56.23	36.05	52.99	32.84	1,525,393
18 年	2,839	86,088	54,009	83,249	51,268	1.86	56.27	35.30	54.42	33.51	1,529,817
19 年	1,161	80,789	51,920	79,628	50,760	0.76	52.72	33.88	51.96	33.12	1,532,428
20 年	3,823	82,648	53,098	78,825	49,445	2.49	53.79	34.56	51.30	32.18	1,536,433
21 年	3,944	82,355	52,748	78,411	49,034	2.56	53.44	34.22	50.88	31.82	1,541,214
22 年	2,321	80,214	50,535	77,893	48,104	1.50	51.95	32.73	50.44	31.15	1,544,200
23 年	2,143	78,657	50,290	76,514	47,949	1.39	50.91	32.55	49.52	31.04	1,544,970
24 年	△ 373	77,964	49,450	78,337	48,181	△ 0.24	50.53	32.05	50.77	31.22	1,543,075
25 年	1,079	78,538	49,697	77,459	47,100	0.70	50.96	32.25	50.26	30.56	1,541,169
26 年	△ 142	76,918	49,169	77,060	48,057	△ 0.09	49.95	31.93	50.05	31.21	1,539,755
27 年	1,314	80,889	51,989	79,575	49,471	0.85	52.60	33.81	51.74	32.17	1,537,272
28 年	1,274	79,386	51,252	78,112	48,912	0.83	51.69	33.37	50.86	31.85	1,535,765
平成 29 年	**640**	**79,343**	**51,565**	**78,703**	**49,746**	**0.42**	**51.79**	**33.66**	**51.37**	**32.47**	**1,532,153**
東灘区	265	12,178	9,112	11,913	8,847	1.24	56.87	42.55	55.63	41.31	214,156
灘区	513	8,653	5,557	8,140	5,191	3.75	63.18	40.57	59.43	37.90	136,968
中央区	1,813	14,171	9,649	12,358	7,735	13.01	101.71	69.25	88.69	55.51	139,333
兵庫区	717	8,083	4,721	7,366	3,488	6.70	75.50	44.10	68.81	32.58	107,056
北区	△ 1,112	6,899	4,996	8,011	5,721	△ 5.14	31.91	23.11	37.06	26.46	216,190
本区	△ 798	4,180	2,532	4,978	2,961	△ 6.05	31.67	19.18	37.71	22.43	132,000
北神	△ 314	3,241	2,464	3,555	2,760	△ 3.73	38.50	29.27	42.23	32.78	84,190
長田区	146	5,239	2,529	5,093	2,140	1.51	54.29	26.21	52.78	22.18	96,493
須磨区	△ 374	6,717	3,484	7,091	3,915	△ 2.33	41.93	21.75	44.26	24.44	160,197
本区	61	3,608	1,717	3,547	1,801	0.85	50.13	23.86	49.28	25.02	71,971
北須磨	△ 435	3,565	1,767	4,000	2,114	△ 4.93	40.41	20.03	45.34	23.96	88,226
垂水区	△ 206	8,588	5,405	8,794	5,558	△ 0.94	39.32	24.75	40.26	25.45	218,417
西区	△ 1,122	8,815	6,112	9,937	7,151	△ 4.61	36.22	25.12	40.84	29.39	243,343

注）社会増減率は各年10月１日現在の人口 1,000人当たりの率である。

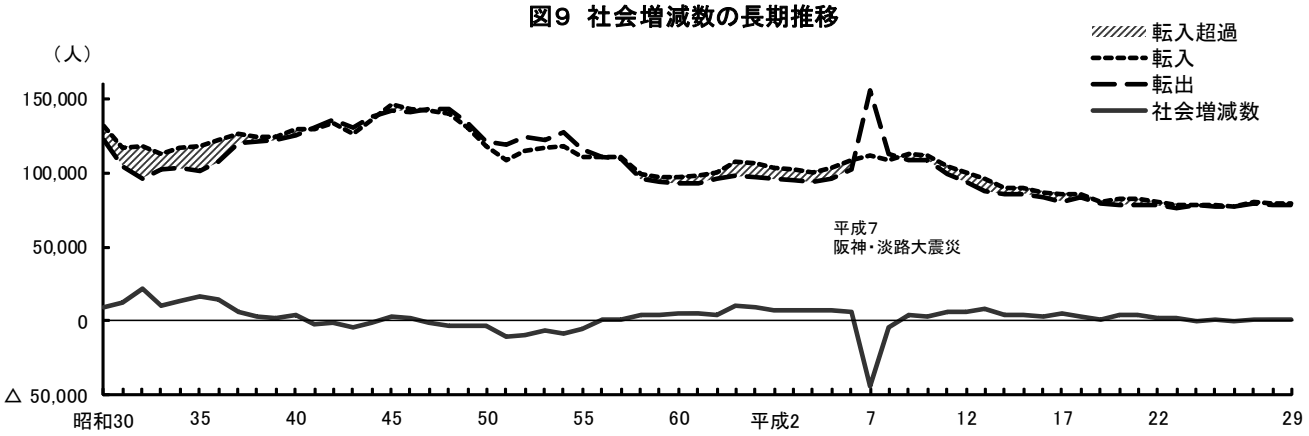
各年の転入・転出数には，同一区域内での本区，支所，出張所相互間の数値は含んでいない。ただし，須磨区のうち本区と北須磨，北区のうちの本区と北神については本区・支所間の移動数を含む数値となっている。

転入・転出数には，市外との移動のほか，市内区間移動，その他の増減（転出取消，職権記載等，職権消除等，平成24年の法改正に伴う外国人住民の取扱変更による数値変動）を含む。

a）平成12年，17年，22年，27年は国勢調査結果，それ以外は推計人口である。

社会増減数の長期的な推移をみると，昭和30年代は社会増減数が６年連続で１万人以上のプラスになるなど，大幅な転入超過で推移していた。昭和40年代に入ると，転出数の増加により社会増減数は伸び悩みの状態となり，特に昭和40年代後半から50年代前半にかけては，社会増減数のマイナス状態が９年間続いた。その後，ニュータウン開発等により市内の住宅供給が活発になると，転出数は昭和54年を境に減少し，昭和56年に再び転入超過となった。その後は転入数，転出数とも横ばいで推移し，年間4,000人から10,000人の転入超過が続いていたが，平成７年の震災では４万人を超える転出超過となった。平成９年以降は再び転入超過となり，超過幅も年々拡大し，平成13年には震災前平均の7,074人を超えた。しかし，平成14年以降は転入超過が続いていたものの超過幅は縮小傾向にあり，平成24年にはマイナスとなった。平成25年はプラス，平成26年はマイナスと推移したが，平成27年以降は３年連続のプラスとなっている。

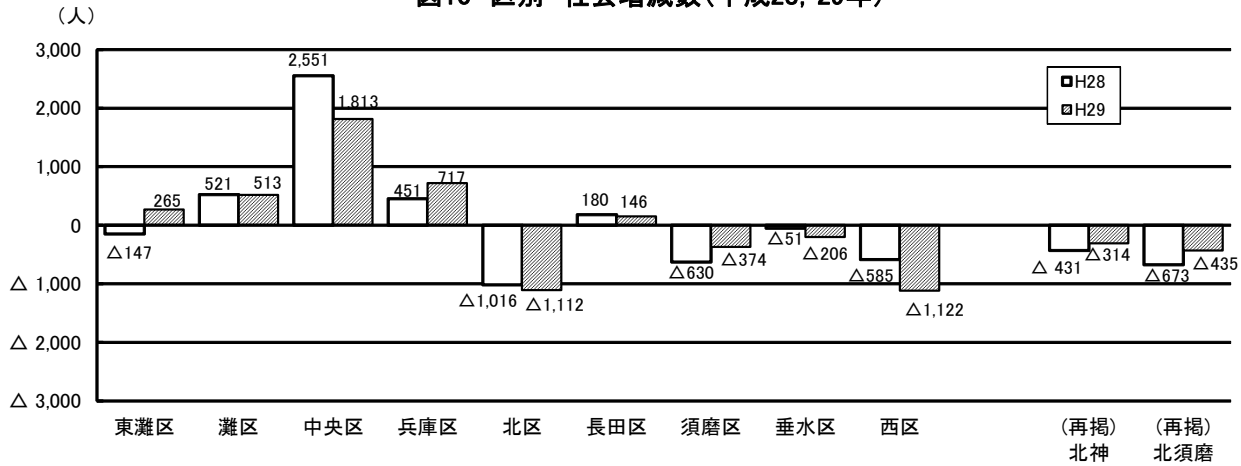
図9 社会増減数の長期推移



社会増減数を区別にみると，中央区の1,813人の社会増が最も多い。次いで兵庫区717人，灘区513人，東灘区265人，長田区146人と５区で社会増となっている。灘区，中央区は，震災前はマイナスで，震災の影響を受けさらに減少幅が拡大したが，その後はプラスが続いている。東灘区は，昨年はマイナスであったが，平成29年はプラスとなった。兵庫区は，平成25年以降５年連続プラスである。長田区は，小幅で増減を繰り返しており，昨年に引き続きプラスとなった。

一方，北区，須磨区，垂水区，西区では社会増減数がマイナスとなった。北区では，平成29年は1,112人減となり，７年連続のマイナスとなった。須磨区のうち本区では61人増であったが，北須磨では435人減で，須磨区全体では374人減となり，８年連続でマイナスとなった。垂水区は平成26年に６年ぶりにマイナスとなり，平成27年はプラスに転じたが，平成28年以降は再びマイナスとなった。西区では平成21年に初めてマイナスに転じて以降９年連続マイナスとなり，平成29年は1,122人減となった。

図10 区別 社会増減数（平成28, 29年）



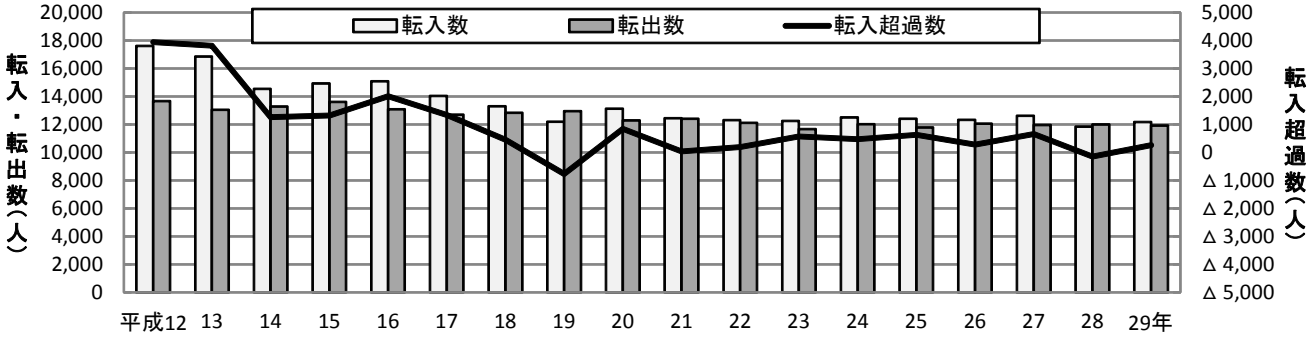
２　区別の状況

(1) 東灘区

平成19年に震災後初めて転出超過となったが，平成20年に再び転入超過となって以降８年連続の転入超過であった。平成28年は転出超過となったが，平成29年は再び転入超過に転じた。

平成29年は転入数12,178人，転出数11,913人で，265人の転入超過となった。

図11-1　転入転出の推移（東灘区）

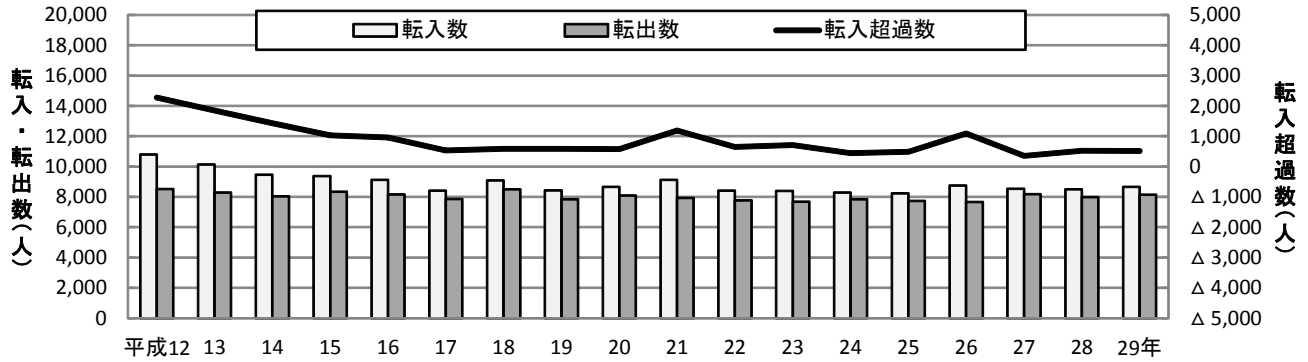


(2) 灘区

平成８年以降，転出数は横ばいであったが，転入数が増加したため，平成９年から転入超過となった。平成10年以降は，転入数，転出数ともに減少傾向にあるが，転入超過が続いている。

平成29年は転入数8,653人，転出数8,140人で，513人の転入超過となった。

図11-2　転入転出の推移（灘区）

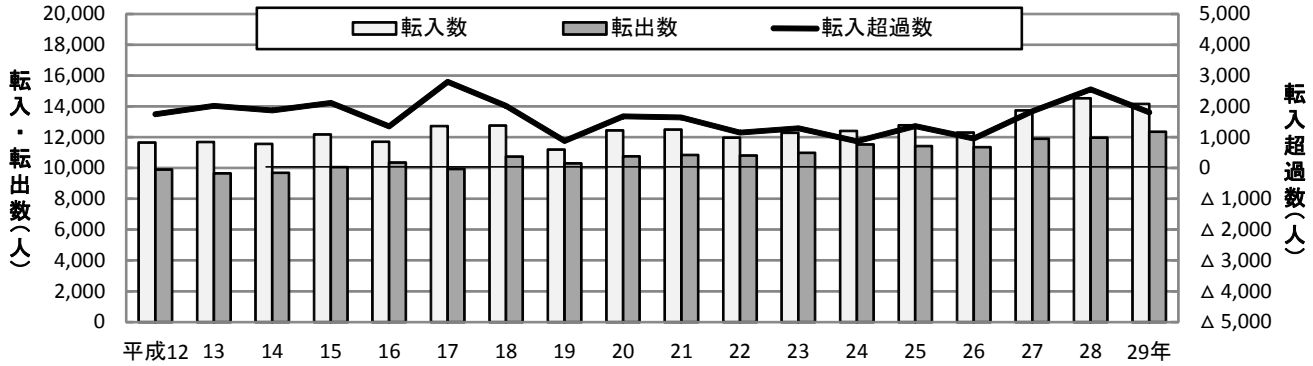


(3) 中央区

平成８年以降，転出数は横ばいであったが，転入数が増加したため，平成10年からは転入超過が続いている。

平成29年は転入数14,171人，転出数12,358人で，1,813人の転入超過となった。

図11-3　転入転出の推移（中央区）

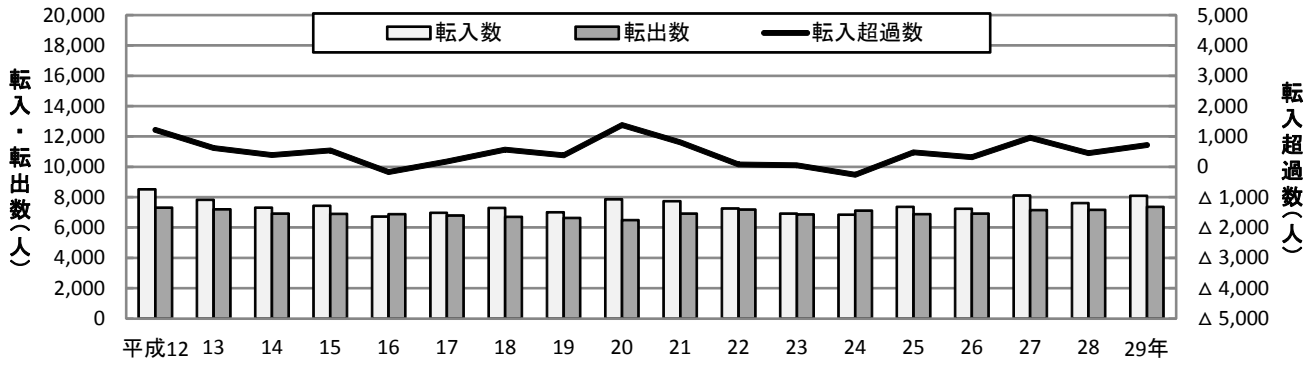


(4) 兵庫区

平成９年に転入超過に転じ，平成10年以降，転入数，転出数とも減少傾向ながら，平成16年と24年を除き転入超過が続いている。

平成29年は転入数8,083人，転出数7,366人で，717人の転入超過となった。

図11 -4　転入転出の推移（兵庫区）

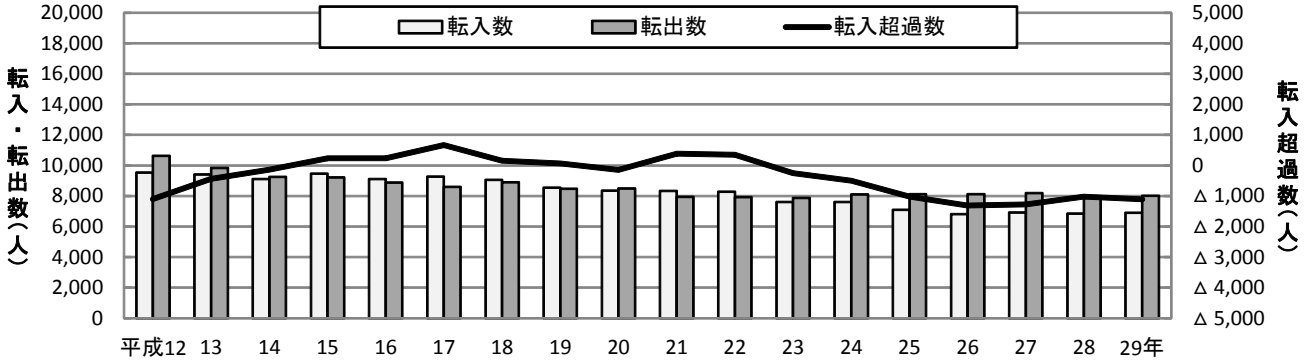


(5) 北区

平成９年から６年連続で転出超過，その後平成15年からは，平成20年を除き転入超過が続いていたが，平成23年に転出超過に転じた。平成25年からは５年連続で転出超過数が1,000人を超えている。

平成29年は転入数6,899人，転出数8,011人で，1,112人の転出超過となった。

図11-5　転入転出の推移（北区）



本区は平成18年以降，北神は平成25年以降，転出超過が続いている。本区については，平成26年，27年は900人を超える転出超過であったが，平成28年に超過幅が縮小した。平成29年は転入数3,658人，転出数4,456人で，798人の転出超過であった。

北神については，平成26年以降，300人を超える転出超過が続いている。平成29年は転入数3,241人，転出数3,555人で，314人の転出超過となった。

図11-5-1　転入転出の推移（本区）

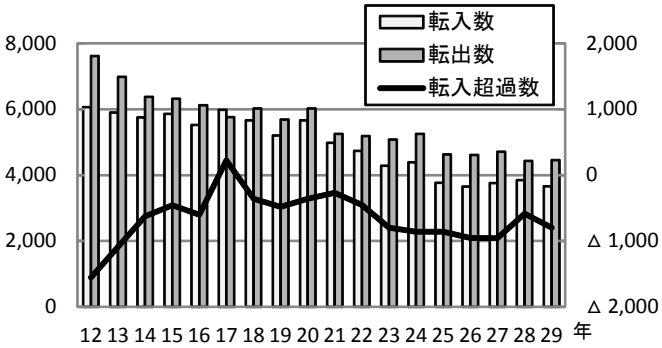
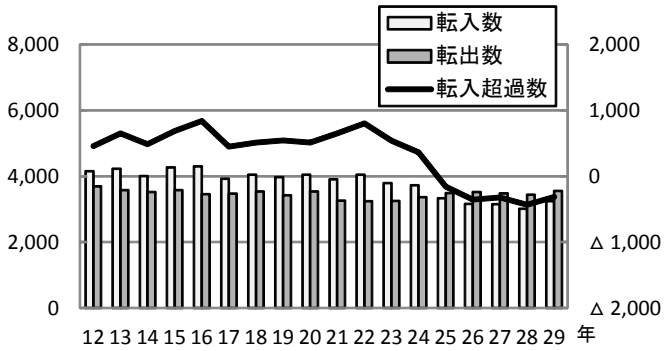


図11-5-2　転入転出の推移（北神）

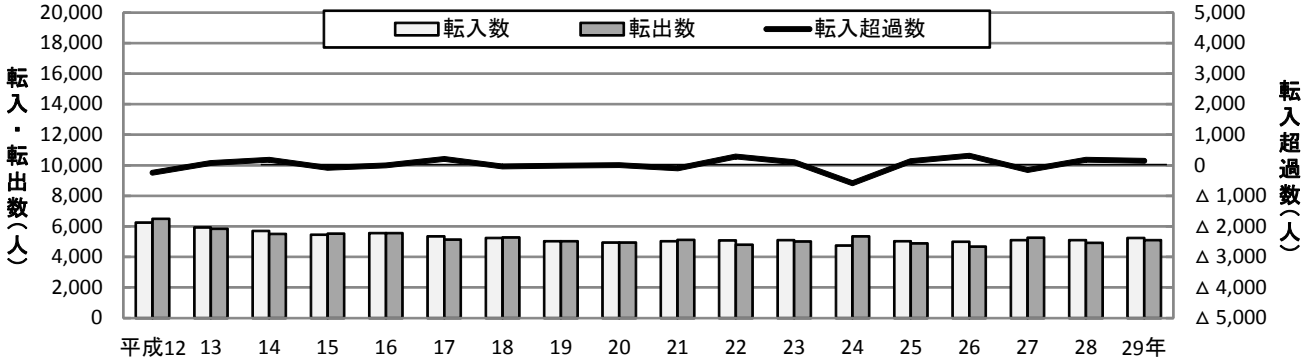


(6) 長田区

昭和38年から一貫して転出超過が続いていたが，平成８年以降転出数が減少する傾向にあり，平成13年は転入超過数77人と，39年ぶりに転入超過となった。その後超過数は小さいものの転入超過・転出超過を繰り返しており，平成28年以降は２年連続の転入超過となっている。

平成29年は転入数5,239人，転出数5,093人で，146人の転入超過となった。

図11-6 転入転出の推移（長田区）

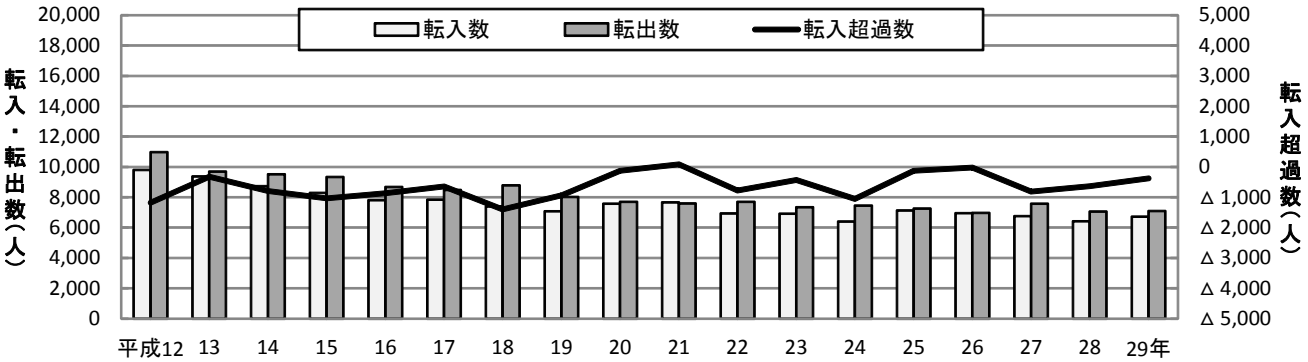


(7) 須磨区

平成７年以降，転出超過が続いていたが，平成21年に転入超過となった。しかし，平成22年に再び転出超過となって以降８年連続の転出超過となっている。

平成29年は転入数6,717人，転出数7,091人で，374人の転出超過となった。

図11-7 転入転出の推移（須磨区）



本区については，平成11年から５年間は転入超過が続いていたが，それ以降は転入超過・転出超過を繰り返しており，平成25年から２年連続で転入超過で，平成27年は転出超過に転じたが，平成28年以降は再び転入超過となり，平成29年は61人の転入超過となった。

北須磨は平成７年以降一貫して転出超過が続いており，ニュータウンのオールドタウン化が進行していると考えられる。平成12年以降超過幅は概ね縮小傾向であり，平成29年は435人の転出超過となった。

図11-7-1 転入転出の推移（本区）

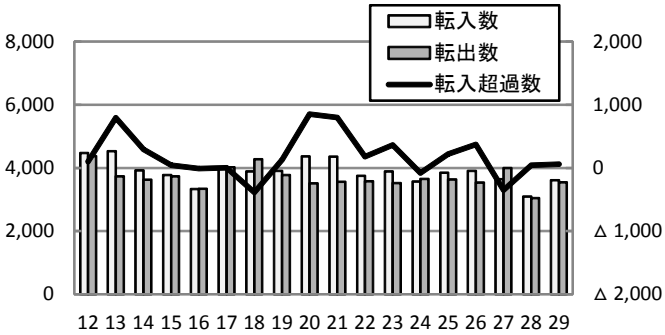
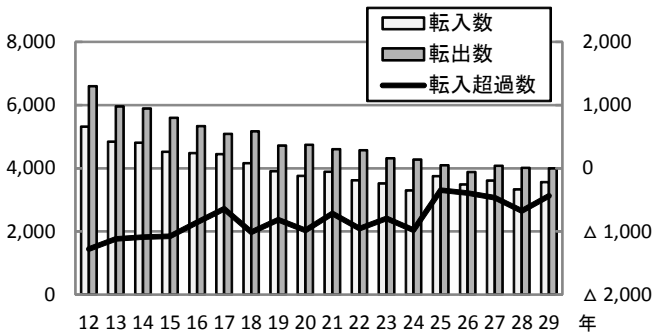


図11-7-2 転入転出の推移（北須磨）

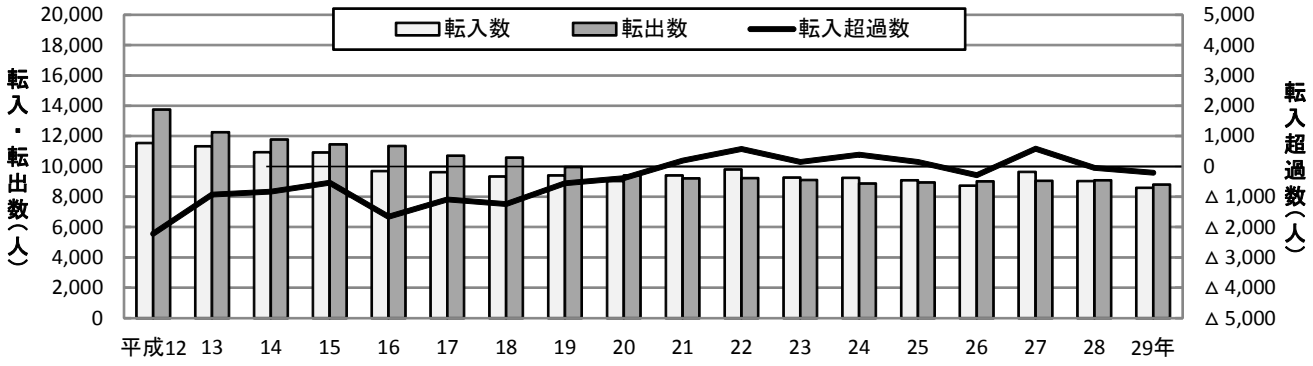


(8) 垂水区

平成13年以降，転入数・転出数ともに減少傾向にあったが，平成17年頃から転入数については横ばいとなり，平成21年に17年ぶりに転入超過となった。その後転入超過が続いていたが，平成26年以降，転入超過・転出超過を繰り返しており，平成28年以降は２年連続の転出超過となっている。

平成29年は転入数8,588人，転出数8,794人で，206人の転出超過となった。

図11-8 転入転出の推移（垂水区）

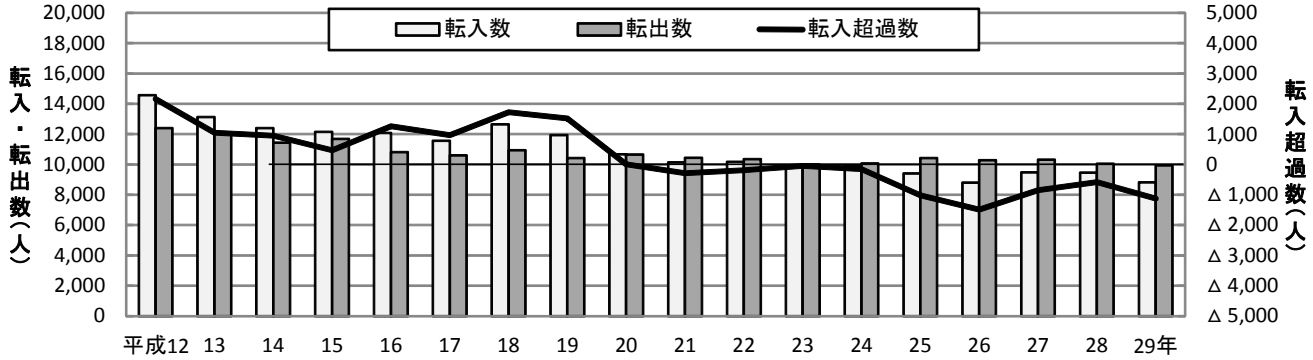


(9) 西区

ニュータウンの開発等により，昭和57年の区発足時から一貫して転入超過が続いていたが，平成８年以降は転入数の減少により，超過幅は急速に縮小していった。その後，転入数の増加により平成18年から２年連続で1,500人を超える転入超過が見られたが，平成20年に縮小し，平成21年に初めて転出超過に転じて以降，転出超過が続いている。

平成29年は転入数8,815人，転出数9,937人で，1,122人の転出超過となった。

図11-9 転入転出の推移（西区）

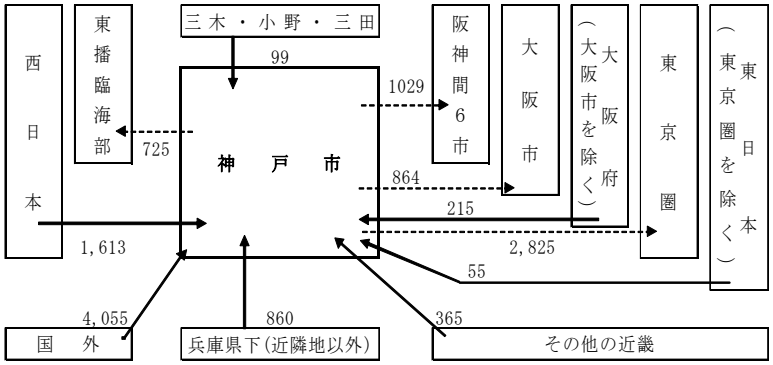


３　相手地域別の状況

阪神間６市及び大阪府に対して，７年連続転出超過となっている。東播臨海部は平成11年以降転入超過が続いていたが，平成28年に引き続き２年連続の転出超過となった。三木，小野，三田は平成24年に転出超過になったものの，平成25年以降５年連続転入超過となっている。近隣地以外の兵庫県下からは，転入超過が続いている。

また，依然東京圏への転出超過が続いており，超過幅は前年より拡大した。

図12　相手地域別転入超過数（平成29年）



※東京圏…東京都，神奈川県，千葉県，埼玉県

表７　区，相手地域別転入超過数

（単位：人）

相手地域	平成29年 全市	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	北区	本区	北神	長田区	須磨区	本区	北須磨	垂水区	西区
転入超過数	**1,819**	**480**	**651**	**2,204**	**932**	**△1,068**	**△772**	**△296**	**224**	**△380**	**48**	**△428**	**△171**	**△1,053**
市内 a)	**－**	**215**	**285**	**290**	**△301**	**△343**	**△343**	**－**	**△165**	**51**	**132**	**△81**	**△18**	**△14**
市外	**1,819**	**265**	**366**	**1,914**	**1,233**	**△725**	**△429**	**△296**	**389**	**△431**	**△84**	**△347**	**△153**	**△1,039**
近畿	△1,079	△21	100	329	135	△473	△299	△174	21	△275	△18	△257	△174	△721
近隣地	△1,655	△407	△64	128	28	△283	△222	△61	△39	△233	△76	△157	△190	△595
阪神間6市	△1,029	△310	△50	18	△36	△194	△124	△70	△26	△145	△79	△66	△71	△215
東播臨海部	△725	△138	△25	78	35	△100	△100	－	△22	△133	△32	△101	△133	△287
三木,小野,三田	99	41	11	32	29	11	2	9	9	45	35	10	14	△93
兵庫県下（近隣地除く）	860	95	41	188	89	95	47	48	36	40	58	△18	143	133
大阪府	△649	150	－	△47	△55	△301	△148	△153	△17	△91	△16	△75	△97	△191
大阪市	△864	31	△32	△143	△95	△176	△111	△65	△36	△58	△11	△47	△114	△241
その他大阪府（大阪市除く）	215	119	32	96	40	△125	△37	△88	19	△33	△5	△28	17	50
その他近畿	365	141	123	60	73	16	24	△8	41	9	16	△7	△30	△68
東日本	△2,770	△438	△343	△321	△81	△603	△372	△231	△84	△293	△121	△172	△283	△324
東京圏	△2,825	△497	△341	△393	△107	△427	△245	△182	△107	△313	△137	△176	△303	△337
その他東日本（東京圏除く）	55	59	△2	72	26	△176	△127	△49	23	20	16	4	20	13
西日本	1,613	421	138	488	183	66	△13	79	90	57	36	21	190	△20
国外	4,055	303	471	1,418	996	285	255	30	362	80	19	61	114	26

a）北区内の本区と北神，須磨区内の本区と北須磨については，本区・支所間の移動数を含む。（その他の区については，区内移動の数値は含まない。）

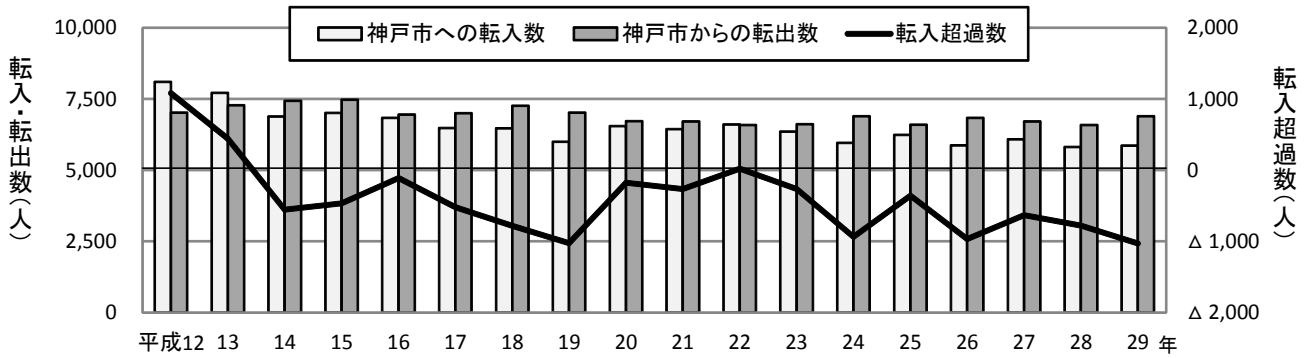
注）「従前の住所地なし」又は「抹消」を除く。「阪神間６市」とは，芦屋，西宮，宝塚，尼崎，伊丹，川西の各市，「東播磨臨海部」とは，明石，加古川，高砂の各市と加古郡（稲美町，播磨町），「東京圏」とは，東京都，神奈川県，千葉県，埼玉県をいう。

(1) 阪神間６市（※阪神間６市・・・芦屋，西宮，宝塚，尼崎，伊丹，川西の各市）

1,029人の転出超過であった。平成14年以降概ね転出超過の傾向にあり，前年の778人と比べ超過幅は拡大し，７年連続の転出超過となった。地域別では尼崎市が446人の転出超過と最も多く，転入超過となった地域は川西市のみであった。

区別にみると，転出超過数の最も多かったのは東灘区の310人，次いで西区の215人で，中央区のみ転入超過となっている。

図13-1　転入・転出の推移（阪神6市）

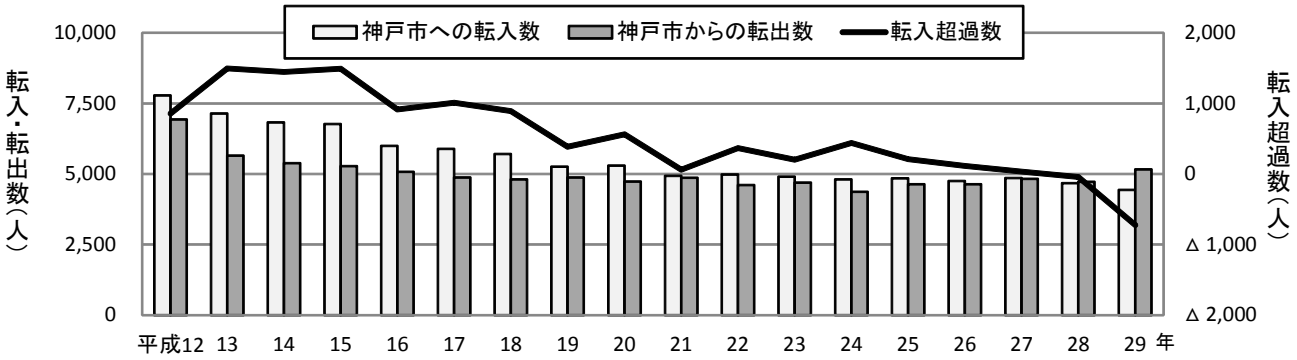


(2) 東播臨海部（※東播臨海部・・・明石，加古川，高砂の各市と加古郡（稲美町，播磨町））

725人の転出超過であった。平成11年以降，17年連続で転入超過が続いていたが，平成28年以降は転出超過となった。地域別では，明石市のみが転出超過である。

区別にみると，転出超過数が最も多かったのは西区の287人であった。一方，転入超過となったのは，中央区の78人，兵庫区の35人であった。

図13-2 転入・転出の推移（東播臨海部）

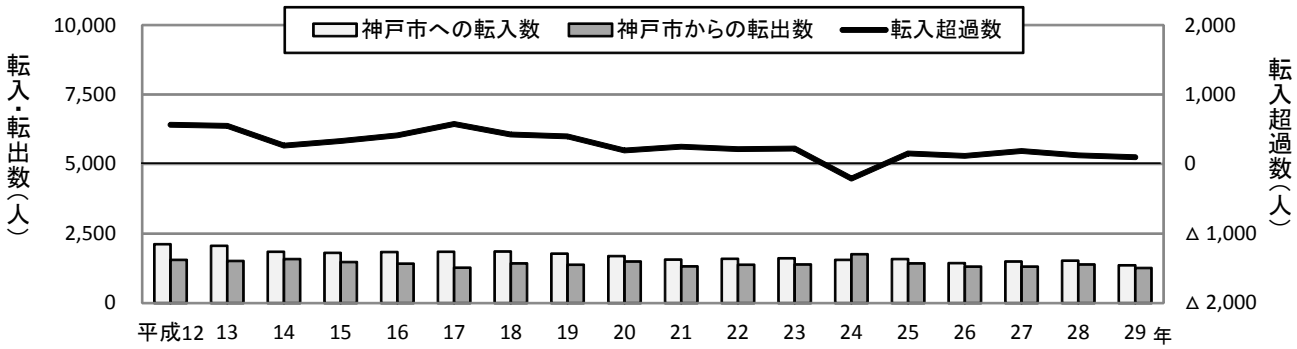


(3) 三木・小野・三田

99人の転入超過であった。平成11年以降転入超過の傾向にあるが，超過幅は縮小した。地域別では，三田市が95人の転入超過と最も多く，転出超過となった地域は三木市のみであった。

区別にみると，転入超過数が最も多かったのは須磨区の45人で，西区のみ転出超過となっている。

図13-3 転入・転出の推移（小野・三木・三田）

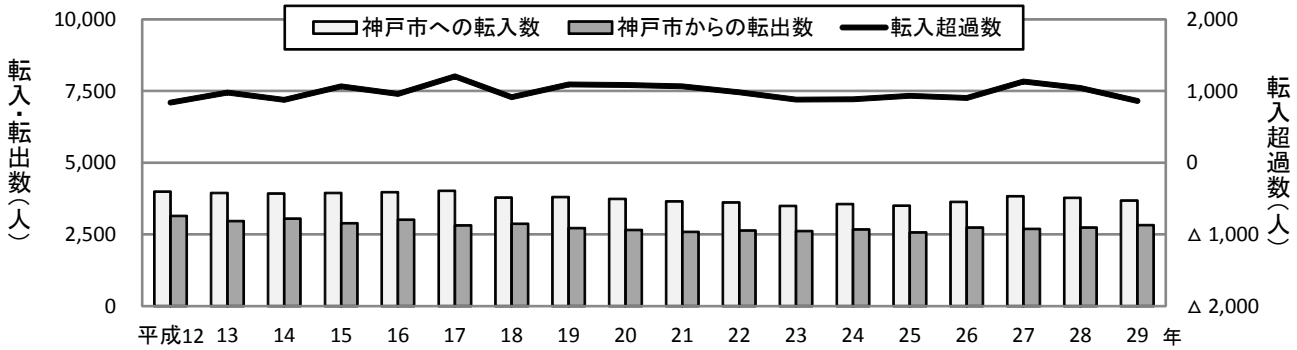


(4) 近隣地以外の兵庫県下

860人の転入超過であった。前年の1,042人と比べるとやや減少したが，平成９年以降，21年連続の転入超過となっている。

区別にみると，全区で転入超過であり，中央区の188人が最も多く，次いで垂水区の143人となっている。

図13-4 転入・転出の推移（近隣地以外の兵庫県下）

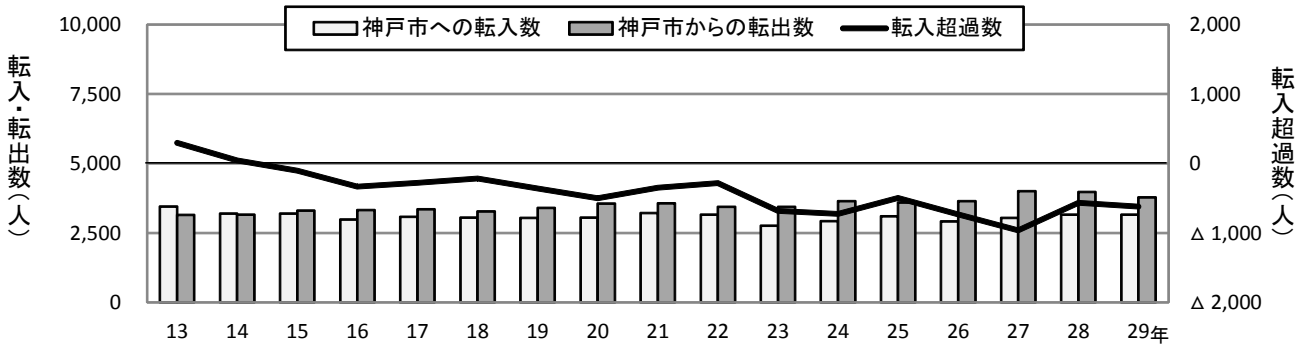


(5) 大阪市及び大阪市を除く大阪府

大阪市に対しては864人の転出超過で，平成15年以降転出超過が続いている。

区別にみると，東灘区を除いて転出超過であり，転出超過数が最も多かったのは西区の241人，次いで北区の176人であった。

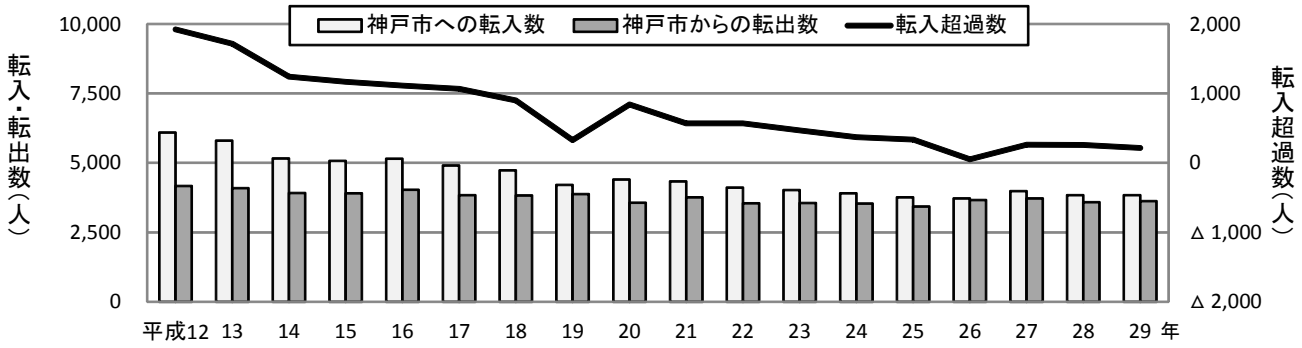
図13-5-1 転入・転出の推移（大阪市）



大阪市を除く大阪府に対しては215人の転入超過で，超過幅は縮小傾向ながら転入超過が続いている。

区別に見ると，北区，須磨区の２区を除いて転入超過であった。転入超過数が最も多かったのは東灘区の119人，次いで中央区の96人であった。一方，転出超過数が最も多かったのは北区の125人であった。

図13-5-2 転入・転出の推移（大阪市を除く大阪府）

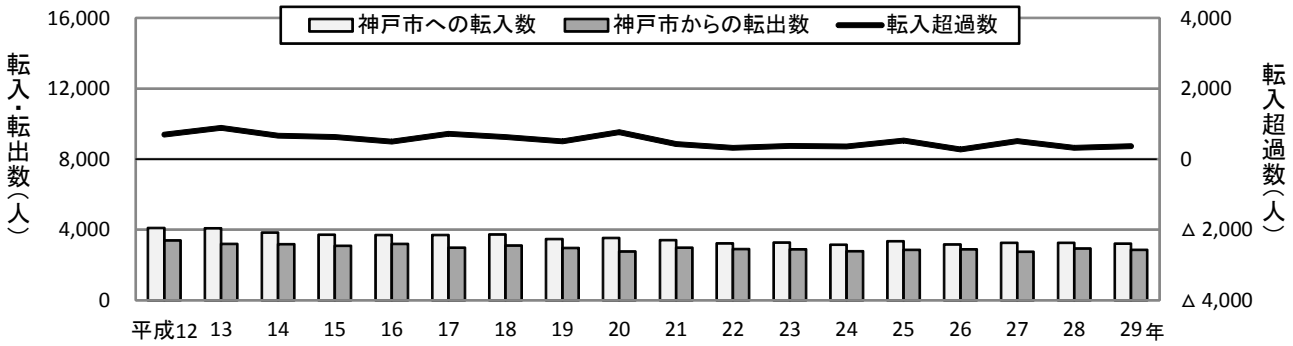


(6) その他近畿

365人の転入超過であった。平成８年以降，22年連続転入超過となっている。

区別にみると，垂水区，西区を除いて転入超過となっている。最も転入超過数が多かったのは東灘区の141人であった。

図13-6 転入・転出の推移（その他近畿）

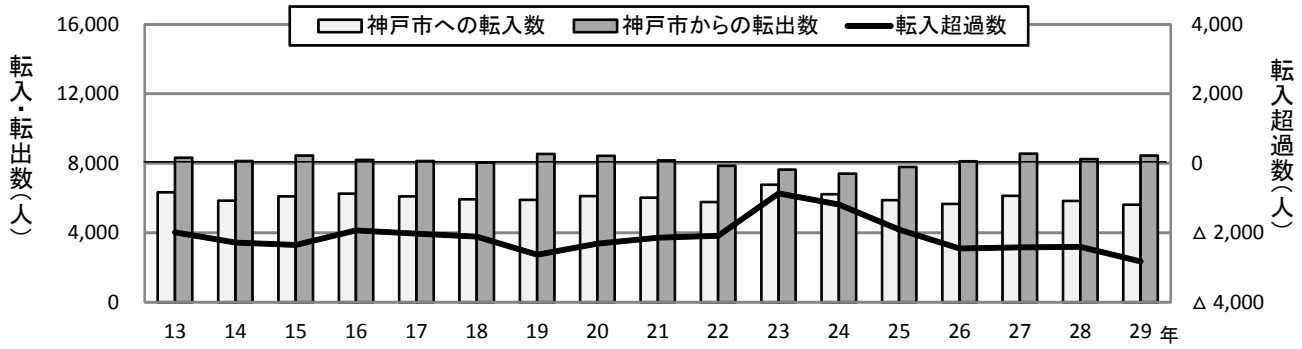


(7) 東京圏及び東京圏を除く東日本

東京圏に対しては2,825人の転出超過であった。東日本大震災の影響のあった年を除き，同水準での転出超過が続いていたが，前年と比べ414人超過幅が拡大した。

区別に見ると，全区で転出超過であり，転出超過数が最も多かったのは東灘区の497人で，次いで北区の427人であった。

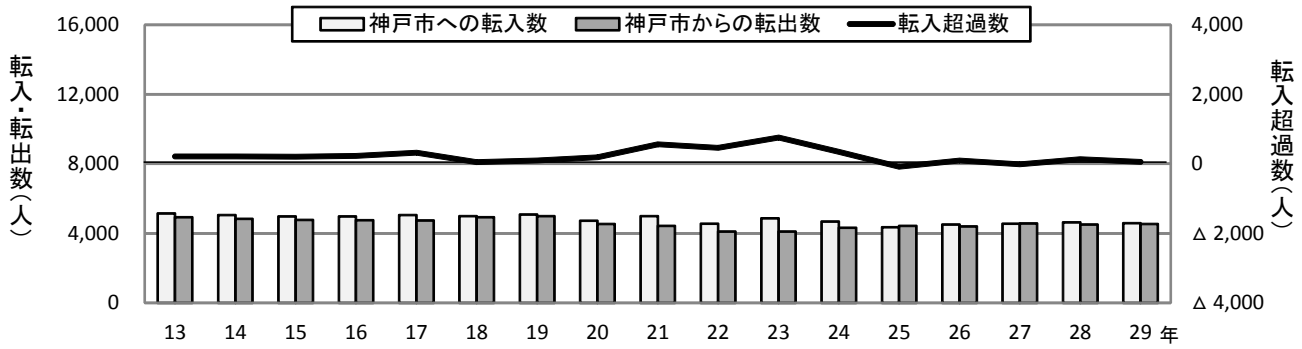
図13-7-1 転入・転出の推移（東京圏）



東京圏を除く東日本に対しては55人の転入超過であった。

区別にみると，灘区，北区を除いて転入超過となっている。最も転入超過数が多かったのは中央区の72人，次いで東灘区の59人であった。一方，転出超過数が最も多かったのは北区の176人であった。

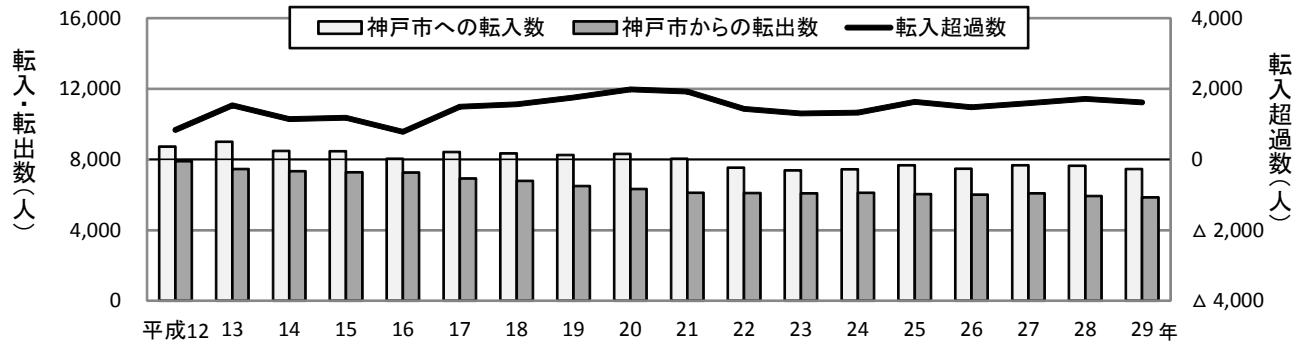
図13-7-2 転入・転出の推移（東京圏を除く東日本）



(8) 西日本

1,613人の転入超過であった。平成８年以降，22年連続で転入超過となっている。区別にみると，西区を除いて転入超過となっており，中央区488人，東灘区421人，垂水区190人の順に多くなっている。

図13-8 転入・転出の推移（西日本）

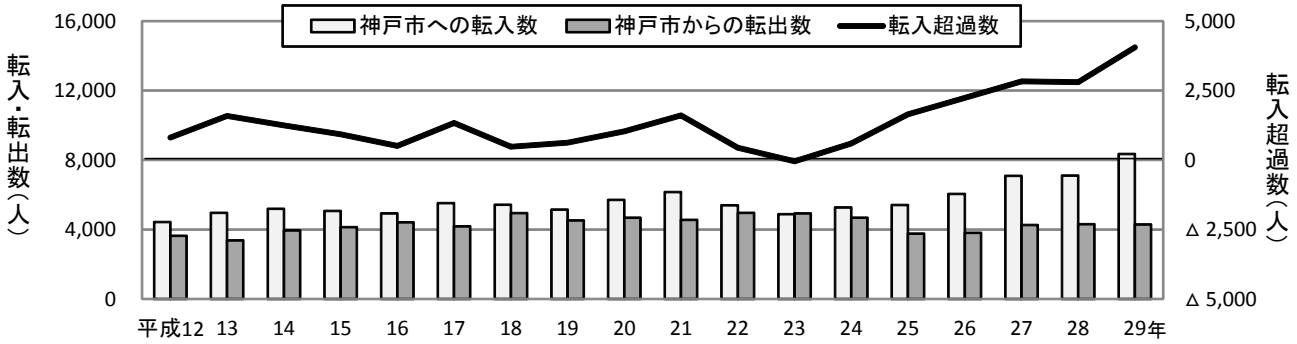


(9) 国外

4,055人の転入超過であった。超過幅は，平成24年以降拡大傾向にある。

区別にみると，全区で転入超過となっており，中央区1,418人，兵庫区996人，灘区471人の順に多くなっている。

図13-9 転入・転出の推移（国外）

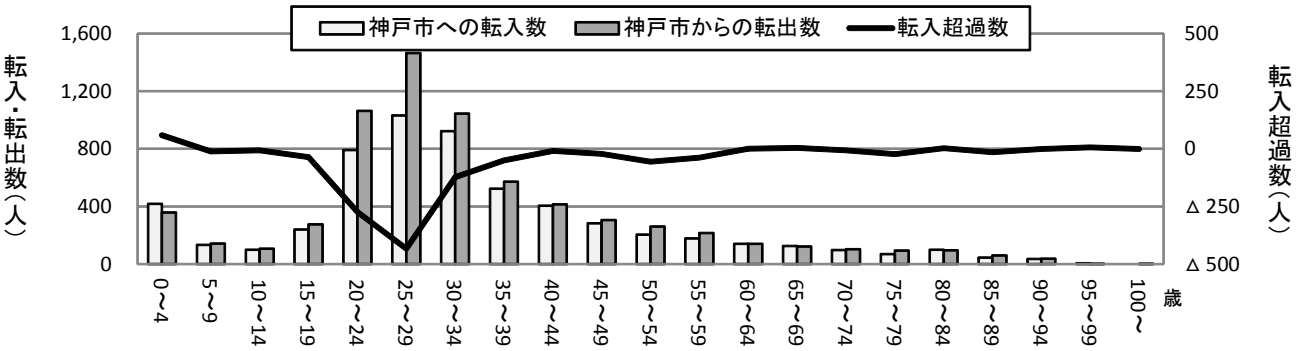


4　年齢別・相手地域別状況

(1) 阪神間６市

1,029人の転出超過であった。転出超過数は，25～29歳で最も多く433人，次いで20～24歳の273人，30～34歳の122人となっている。

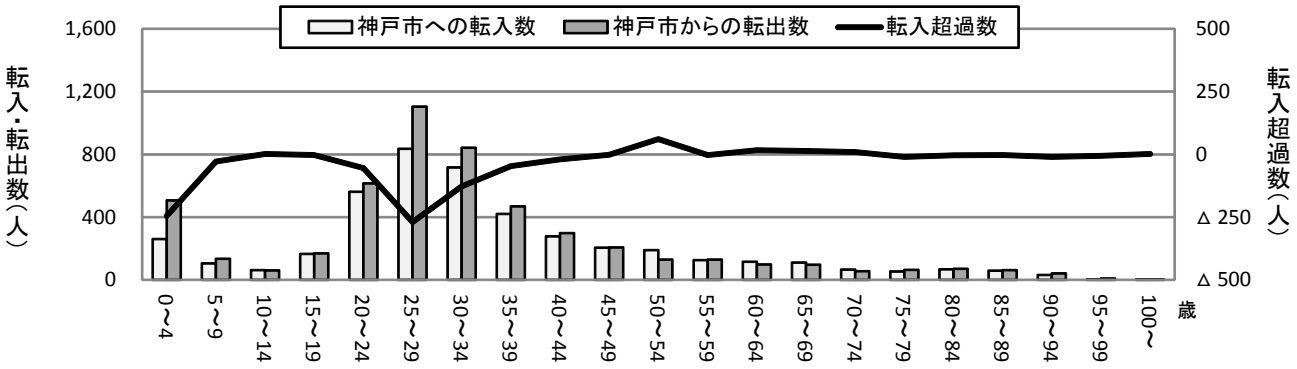
図14-1 年齢別，転入・転出の推移（阪神6市）



(2) 東播臨海部

725人の転出超過であった。転出超過数は，25～29歳で最も多く269人，次いで０～４歳の245人，30～34歳の127人となっている。

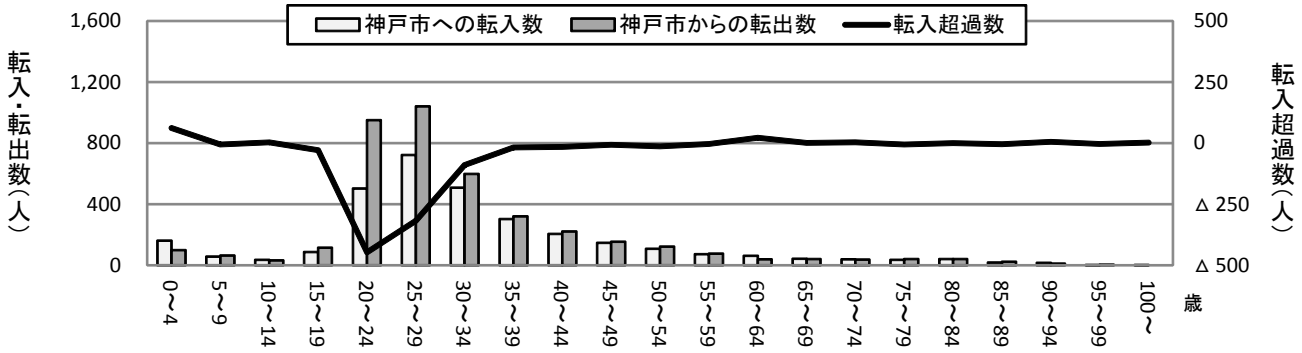
図14-2 年齢別，転入・転出の推移（東播臨海部）



(3) 大阪市

864人の転出超過であった。転出超過数は，20～24歳で最も多く447人，次いで25～29歳の318人，30～34歳の90人となっている。

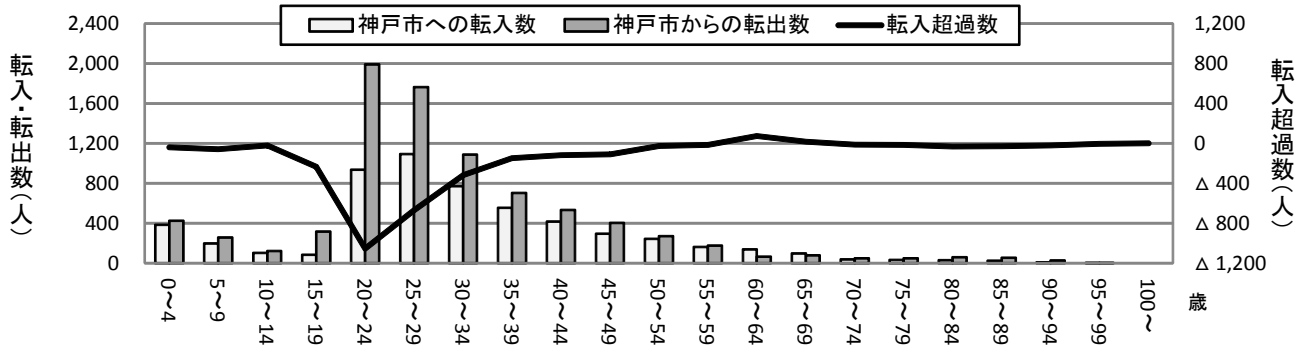
図14-3　年齢別，転入・転出の推移（大阪市）



(4) 東京圏

2,825人の転出超過であった。ほとんどの年齢で転出超過となっており，超過数は20～24歳で最も多く1,054人，次いで25～29歳の669人，30～34歳の318人となっている。

図14-4　年齢別，転入・転出の推移（東京圏）



(5) 西日本

1,613人の転入超過であった。ほとんどの年齢で転入超過となっており，超過数は20～24歳で最も多く859人，次いで15～19歳の401人，25～29歳の95人となっている。

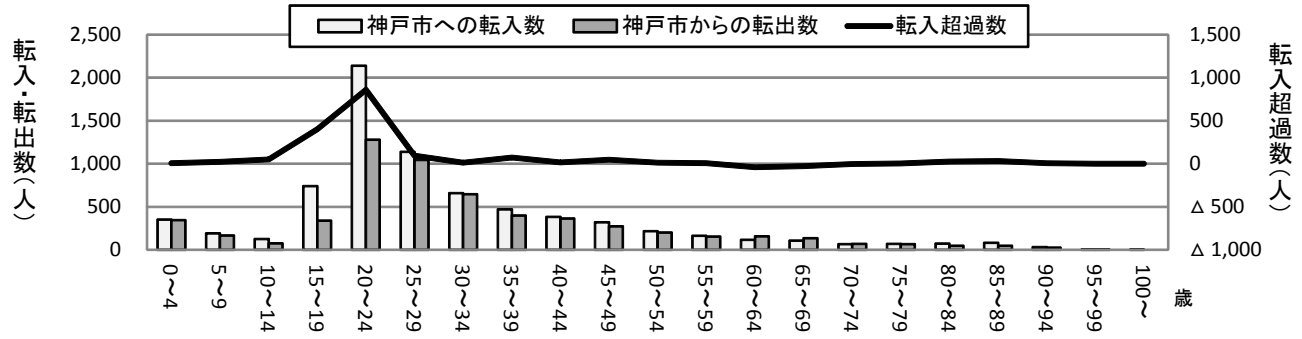



図14-5　年齢別，転入・転出の推移（西日本）